東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

みんなで使おう! 学校図書館 Vol.13：「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」報告集：令和3年度文部科学省事業 学校図書館の活性化に向けた調査研究

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2022-03-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 東京学芸大学学校図書館運営専門委員会
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173627

みんなで使おう！
学校図書館 Vol.13

『先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース』報告集

令和３年度　文部科学省事業　学校図書館の活性化に向けた調査研究

東京学芸大学　学校図書館運営専門委員会

はじめに

この冊子は、東京学芸大学学校図書館運営専門委員会における１年間の営みを概括したものです。学校現場で役立つ事例の蓄積から始まった当事業ですが、今や学校図書館と関わるあらゆる情報の拠点ないし人的交流のひろば、協働的な学びを支援する組織として発展してきています。教育界で消えていった他のデータベースと異なり、有機的に成長しつづけているのは、附属世田谷中学校の渡邉教諭が提唱されたハブとしての学校図書館のあるべき姿を体現しているからでしょう。また、社会を変革する創造の拠点としての特質性と無限の可能性が、今回の附属国際中等教育学校における技術科の実践から浮き彫りになりました。収録事例の教科・科目を広げながら、47 都道府県すべて揃えることや、さらに検索しやすくしたり、子ども自身も使えるような改良も目指したいところです。

さて、一人一台のタブレット端末が現実化する中で、コロナ渦も相まって、学校図書館活用が停滞する懸念が多く寄せられました。一方、デジタルの膨大な情報量も、一画面に収められるのは僅かであり、たとえメタバースをもってしても、学習環境としての学校図書館の優位性は揺らぎそうもありません。家にある本の冊数が多い児童生徒ほど、国語と算数・数学ともに小中の平均正答率が高い結果が社会的なトピックにもなりました（国立教育政策研究所『令和３年度　全国学力・学習状況調査　報告書 【質問紙調査】P.125』）。デジタルを補うための紙の図書という意識に陥ることなく、附属世田谷小学校の実践事例のように、適材適所で学びの可能性を拡げる力を育む重要性が増しています。

附属小金井小学校に僅かに残る古い蔵書をみていると、インターネット登場後の自由で魅力的な本作りへの変化を実感します。以前は、一冊の中での完結性が高く、テレビで例えると地上波的な平均・平板な側面がありました。今や子どもがデジタルで気軽に調べたり、スマートフォンを携えた保護者と対話しながら疑問を解消でき、著者が意図をより的確に伸び伸びと表現して、難しい内容を難しいまま伝えるメッセージ性が強まっています。GIGA スクール時代だからこそ発展性・総合性を重視した選書の技がますます問われる状況です。

また、今回の GAKUMOPAC の事例と同じく、公立学校でも地域の公共図書館との連携が鍵となります。とはいえ、そもそも Wi-Fi が学校図書館に届かず、公務システムのアクセス権限がない、タブレットが配備されていない課題もあり、他の教員や管理職、教育委員会に働きかけていく司書教諭の活躍が待たれます。

大学図書館のラーニングコモンズには新たに学校図書館コーナーが設けられ、絵本や児童書が出迎える暖かさがもたらされました。国立大学の附属学校司書間の交流も進展しています。東京学芸大学の総合力を生かして本事業を発展させる責務は高まるばかりです。

令和４年２月

東京学芸大学教授

前田 稔

目　次

はじめに …… 1
目次 …… 2

【令和３年度の研究】

１．本事業の目的 …… 4
２．学校図書館の活動の活性化のための具体的な活動内容 …… 4
（１）学校図書館を活用した授業実践研究の推進 …… 4
（２）学校司書のための研修プログラムの企画・実施・効果の検討 …… 5
（３）『先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース』の改良と普及 …… 5
３．事業成果の評価の方法 …… 5
４．調査研究の成果と課題 …… 6
（１）学校図書館を活用した授業実践研究の推進 …… 6
① 東京学芸大学附属世田谷小学校 …… 6
② 東京学芸大学附属世田谷中学校 …… 8
③ 東京学芸大学附属国際中等教育学校 …… 13
■ 事業委員による指導・助言 …… 15
（２）学校司書のための研修プログラムの企画・実施・効果の検証 …… 19
（３）『先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース』の改良と普及 …… 23

【資　料】

■ 附属学校図書館データ一覧 …… 28
■ 附属間相互貸借データ一覧 …… 39
■ 活動の記録　～会議等～ …… 40
■ 日本教育大学協会研究集会報告 …… 41
■ 令和３年度　文部科学省事業報告会プログラム …… 43
おわりに …… 44
学校図書館運営専門委員会関係者名簿 …… 45
事業委員会・研究協力者一覧 …… 46

【令和３年度の研究】

１．本事業の目的

東京学芸大学では、附属学校運営参事、附属学校課長、各附属学校の司書教諭・司書、そして大学の学術情報課長、学術情報課学術企画係長を委員として、学校図書館運営専門委員会が構成されている。本委員会では、本学の全附属学校園の読書環境づくりと図書館活動について組織的に取り組むとともに、大学図書館や大学の研究事業との連携・協力も行ってきた。文部科学省委託事業に関しても、同様に、本委員会で協力して取り組み、本学教授及び他大学教授・公立図書館関係者で構成する事業委員会による指導・助言を受けながら、実践・調査・研究を進めてきた。また、大学図書館とも、月に 4 回巡回している附属学校園への連絡便を利用した相互貸借など、協力体制を構築している。

附属幼稚園及び附属特別支援学校をのぞき、専任の学校司書が常駐する附属学校では、児童・生徒の読書環境が整えられている。機能する学校図書館が、「社会に開かれた教育課程」を打ち出した新しい学習指導要領のもと、どのような学習支援を行うことができるのか、率先して発信していく役割が求められている。教員も、学習指導要領等を踏まえ、各教科等において学校図書館の機能を計画的に利活用することや、各教科を横断的にとらえることが求められている。

平成 21 年度より、文部科学省事業の一環として『先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース』の運営を行ってきたが、教員養成系大学の附属学校からの発信は、現役の教員だけでなく、教員をめざす学生にとっても有益な情報源となっている。GIGA スクール構想のもと、今後ますます情報活用能力の育成が重要となってくる。それに応えられる学校図書館の環境整備と支援の在り方を検討するとともに、学校司書のスキルアップをめざす。

２．学校図書館の活動の活性化のための具体的な活動内容

（１） 学校図書館を活用した授業実践研究の推進

【附属世田谷小学校】

研究開発校として指定を受けて実施している、子どもたちの追究したいことを中心に学びを進めている「ラボ」の活動を中心に、学校図書館の 3 つの機能と関連させて子どもたちの情報活用能力の育成を図る。その際には、子どもたちの自主的、自発的な学習活動を支えられるように、従来の書籍などを中心とした学校図書館の取り組みだけではなく、情報センターとしての機能を最大限に引き出すことができるように、多様なメディアを用いた学校図書館の取り組みを模索していく。特に GIGA スクール構想と関連させて、タブレットの活用についても重点的に取り入れ、新たな学校図書館のモデルを提案する。

【附属世田谷中学校】

次年度から本校の研究テーマの軸に「情報活用能力」が据えられる。ここから「学校図書館」の位置づけ・機能へ再照射し、情報の入り口としての学校図書館活用について学校図書館をハブとした教科横断・教科連携を「資質・能力」の育成の視点から考えたい。具体的には、社会科や家庭科における教科特有の資料を活用していく学習について、土台となる資料の探し方、読み取り方、情報の抽出や分析、アウトプットの方法など、探究的な部分に対して国語科を中心とした教科連携の実践を行う。そこでの「見方・考え方」の深まりを促す方法を検討し、その効果を検証する。また、「読むこと」に関わる多様な視点を他教科と関わる読書材を扱うなかで学ぶことの有効性も検証したい。読書材とは絵本、文学作品、ノンフィクション、新聞記事、論文といった幅広いジ

ャンル、さらには印刷資料だけではなく、デジタル資料もその対象としている。学校司書は、それぞれの授業のねらいを理解し、支援ができるように努める。

尚、資料の探し方に関しては、昨年度に引き続き、印刷資料とデジタル資料を探す際に、学芸大総合 OPAC を有効活用できる場面を用意し、ICT による検索スキルの向上も目指す。

【附属国際中等教育学校】

2017 年に改定された中学校学習指導要領技術・家庭技術分野の内容では、技術による問題解決の学習が重視されている。このような学習では、生活や社会の中から技術に関わる問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想して具体化したり、自ら問題解決を振り返ったりする学習が示されている。本研究では、問題解決の学習のための知識・技能の獲得の場面に注目し、図書館における展示型ブックスタンドを取り上げる。図書館の書籍のサイズや厚み、展示の方法等を調査・検討し、本校の図書館に最適な展示型ブックスタンドを探求・創造していくことを通して、知識、技能の獲得を目指す。教員が用意した問題の発見、課題の設定ではあるが、中学校技術科の内容 A「材料と加工の技術」の学習における「生活や社会を支える材料と加工の技術」の内容・項目で、授業実践する予定である。

（２） 学校司書のための研修プログラムの企画・実施・効果の検討

令和 2 年度は、コロナ禍のため、オンラインですべての研修を行ったが、参加者の多くから次年度以降も、オンラインでの開催を望む声が寄せられた。そこで、令和 3 年度は、開催時期を従来行っていた夏休み中の実施に固定せずに考えた。研修の対象としても、学校司書に限定したもの、教員と一緒に受講できるもの、学校図書館の枠を超えた参加者が見込まれるものを考えた。研修のキーワードとしては、「選書・除籍」「蔵書構築」「検索」「電子図書館」「ICT 活用」「授業支援」「探求」「著作権」などがあがっている。参加者には、アンケートフォームからの入力をお願いし、評価指標をもとに数値で表せる項目と、自由記述を入れ、効果を検証した。

（３） 『先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース』の改良と普及

令和 3 年度の新たな取組として、学芸大総合 OPAC（以下 GAKUMOPAC）に、本データベース事例で紹介している書籍を反映させることを目指す。GAKUMOPAC は、本データベース内にバナーを置き、サイトを利用している人にも案内をする。また、次年度は特に気になった実践事例を書き込んでもらえるアンケートフォームをサイト内におき、どのような実践事例がよく見られているかなども検証したい。

尚、データベース改良にあたっては、㈱カーリル代表吉本龍司氏に協力いただいた。

３．事業成果の評価の方法

学校図書館を活用した授業実践に関しては、授業者の教員の振り返り、および授業を受けた児童・生徒への聞き取り、成果物などにより、その効果を測定する。また研修に関しては、昨年度にひき続きすべてオンライン型でおこなったため、受講者からのアンケートを評価指標に基づいて分析をおこない、オンラインでの研修のありかたを検証する。Web サイトに関しては今年度の教科別掲載事例やアクセス数の推移を把握し、新型コロナウイルス感染症の流行や GIGA スクール構想下における Web サイトの役割を検証する。

４．調査研究の成果と課題

（１）学校図書館を活用した授業実践研究の推進

①東京学芸大学附属世田谷小学校

情報活用能力を育成する Laboratory の活動とそれを支えるメディアルームの改革

司書教諭：梅田　翼　　司書：金澤　磨樹子

1. はじめに

本校では、令和元年度より文部科学省から研究開発指定学校の指定を受けており、学習指導要領などの現行の教育課程の基準によらない教育課程の編成を行い実施している。本授業実践の報告では、その様な状況の中で編成を行った教育課程の中に位置づけられた、Laboratory の時間の中での情報活用能力の育成や、それを支えるメディアルーム（本校では、学校図書館のことをメディアルームと呼ぶ）のあり方を GIGA スクール構想の本格実施という大きな学習環境の変化とも連動させて検討し改革について紹介する。

2. Laboratory の時間における、情報活用能力の育成

(1) Laboratory の活動について

Laboratory の時間は 3 年生以上の学年で実施している活動であり、一人一人がテーマや研究室を選んで、自らの考えた追究の対象について研究を行っていく時間である。第 3 学年においては、Laboratory の時間の導入として同学年の仲間と一緒にラボ活動を行う。そして、第 4 学年からは、子どもたちが所属する研究室において異学年の集団で追究を行っている。研究室を選ぶ際には教員が開いた枠（「追究の対象」や「追究する際の視点」）と、自らの興味・関心から生まれた追究したいこと（「追究の対象」や「追究する際の視点」）を重ね合わせて、子ども自身が所属先の目星をつけ、担当する教員と直接のやり取りを経て「追究のテーマ」を明確にしていく中で所属先を決定していく。（図 1 参照）

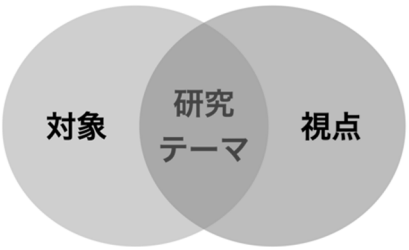


図１：「対象」「視点」と「研究テーマ」

担当教員は、子どもたちが「学びのビジョンをもち、それに迫るためにどういった目標・道筋、表現方法が必要になるか」を思考し選択することのできる学習環境を作ることを大切にしていく。

(2) 具体的なラボの活動の事例

子どもたちの設定する研究テーマは多種多様なものとなる。しかし学校や教師が設定した課題ではなく、子どもたち自身がテーマを設定しているので、「教師によってさせられる学び」ではなく、本当の意味で「自ら進んで取り組む学び」が実現され、子どもたち自身が自走していくことが可能となっている。ここでは、Laboratory の活動とそこでの GIGA スクール構想で配られているタブレット端末（本校では iPad を採用）の活用事例を 1 つ紹介する。

【生物のふしぎとひみつ　ラボ】

対象の「生物」を様々な視点で捉え、そこから見出した「自らのふしぎ」を「追究の対象」として活動に取り組み、その「ふしぎ」の答えとしての「ひみつ」を見出していこうというラボである。生物と触れ合う時間に没頭することから始めさせ、その中で、個々の「ふしぎ」を発見させ、追究を行わせていく。また、仲間の活動を知ることによって、自分にはない視点に気

づき、更に活動が生まれていくなどの姿を期待し情報を共有するような時間や機会を設けるようにした。

活動の中では、iPad にインストールされた Microsoft の Teams で情報を共有したり MetaMoJi の Classroom（共同編集アプリ）を使って自らの情報をまとめたりした。

(3)情報活用能力の育成

本校で作成した「育成を目指す情報活用能力の一覧表」を基に、「子どもたちにどの様な力をつけていくと良いのか」「今までに身に付けたどの様な力を発揮させると良いのか」といったことを意識しながら活動を進める。

情報社会やその後に続く Society5.0 においては、多種多様で雑多な玉石混交の情報の海に子どもたちは投げ出される。GIGA スクール構想によって、学校においても同様の状況が生み出されている。その様な状況の中で、教師自身が教科などの指導の中で意識的に情報活用能力の育成について取り組んでいくことは急務と言える。

3. メディアルーム（学校図書館）の改革案

学校図書館の 3 つの機能から考えても、子どもたちの追究を支える場として学校図書館が重要な役割を担うことは明白である。現行の学習指導要領や GIGA スクール構想によって子どもたちの学び方は大きく変わってきている。そこで、本実践を行うにあたって「学習センター」としての機能や「情報センター」としての機能に着目して、次のような改革を行った。

(1)インターネットを活用した、蔵書検索や貸出予約の実施

貸出予約が可能になることで、子どもたちの計画的な本の貸し借りが可能になる。インターネットを活用することで、必要なときにすぐに予約が可能である。

(2)QR コードの活用

子どもたちが調べ易かったり、より確かな情報が発信されているインターネットサイトに、子どもたちを導くことが可能となる。

(3)蔵書構成の工夫

インターネットでは確かな情報が得られないような内容の専門書を蔵書構成に含めることで、学校図書館の価値を高める。

(4)プリンターの設置

調べたことを蓄積していくためには、蔵書の内容をコピーすることが必要となる。また、iPad からの直接印刷にも対応することで、学校図書館の「学習センター」「情報センター」としての機能を強化する。

(5)大型ディスプレイや書画カメラの設置

情報共有の場としても学校図書館が機能するように、普通教室の環境を整えるのと同時に学校図書館の環境も整えていく。

4. さいごに

アメリカの知覚心理学者のジェームズ・ギブソンにより提唱されたアフォーダンス理論というものがある。アフォーダンスとは「環境が動物に与え、提供している意味や価値」「行為の可能性」といった意味である。その理論を背景に学校図書館の環境整備を行ってきた。今後も改革や整備を進め、学校図書館の存在価値を子どもにとっても、教師にとっても高めていきたいと思う。

②東京学芸大学附属世田谷中学校

「情報の入り口としての学校図書館活用」～絵本を通して幼児とのかかわり 幼児の発達について考える～

報告者　司書教諭：技術・家庭科（家庭分野）関野 かなえ

1.　はじめに

本校では学校司書が常駐しており、教員による学校図書館の利活用が積極的に行われている。教科の学習にとどまらず、総合学習での探究的な取り組みや学校行事等、教育活動全般を通して学校図書館が頻繁に活用されており、大変恵まれた環境にあるといえる。

今年度の本校研究主題「情報活用能力を育むモデル単元の開発」のもと、学校図書館においては、「学習・情報センター」としての機能の充実をはかるために、生徒の自発的、主体的な学習活動の支援とともに、情報の収集・選択・活用能力を育成できるよう研究を進めている。

様々な教科において学校図書館を活用した授業実践が行われているが、今回は技術・家庭科家庭分野（以下、家庭分野と表記）において「絵本」を中核に据え、学校司書と連携を取り合いながら、学校図書館を活用して行った授業実践について報告する。

2.　本授業実践について

(1) 今回の授業を計画するにあたって

学校図書館を使用するために授業をするのではなく、教科としてのねらいを明確にし、何を身に付けさせたいのか授業者がしっかりとゴールを見据えた上で授業を計画することが重要であると考えている。本題材を扱うにあたり、子どもが健やかに育つ家庭・社会を築くために、将来、子どもを大切に慈しむ生徒を育成したいという願いのもと、親だけが子どもを育てるのではなく、子どもが健やかに育つために、家族・家庭はもちろんの事、地域や社会全体で子どもを育てる視点をもたせることができる授業を目指したいと考えた。また、本題材のねらいを達成する上で学校図書館を活用し、絵本や幼児の発達についての資料を用いて授業を展開することから、学校司書と連携を密に取りながら本題材を計画した。

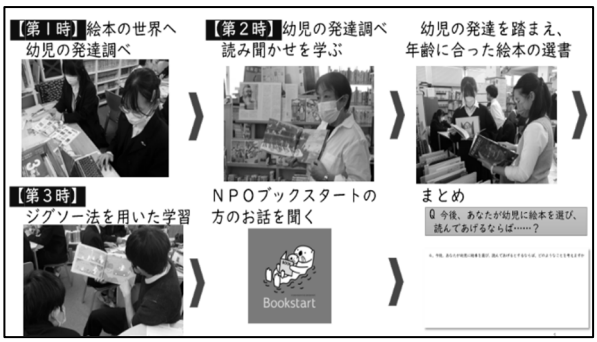
(2) 本実践の概要

① 本題材のねらい

- 幼児の発達について学び、年齢に合った絵本の選書を通して、幼児への理解を深める
- 絵本を通して、幼児の発達にとってのおとなの役割を自覚し、将来に向けて幼児との絆、心と心をつなぐ機会とする

② 本題材の計画

本題材は第一次と第二次で構成している。第一次では、自分が担当する年齢の幼児の発達について理解を深め、年齢に合った絵本の選書を行い、幼児の発達の特徴や絵本の選定理由を紹介し合う活動を行った。第二次では幼児との触れ合い体験を計画し、自己紹介や絵本の読み聞かせ等、幼児とのかかわりの場を設けた。（授業内容は「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」に掲載予定。）



本題材の計画 第一次（3 時間扱い）

③ 学校司書・他教科との連携

本題材において、「絵本」を中核に据えた授業を展開し、学習のねらいを達成していく上で、学校司書の存在がとても大きな役割を担っていたと感じている。

今回、学校司書に担ってもらったことは、約 200 冊にわたる絵本の準備や幼児の発達（年齢別）の特徴、読み聞かせの仕方についての資料の準備、小学校の学校司書や NPO ブックスタートの方との連絡等、多岐にわたる。学校司書に絵本や資料を準備してもらうだけでなく、授業の構想段階から相談にのってもらい、授業のねらいや授業者の願いを受け止めてもらった上で、資料の準備や小学校司書、NPO 法人ブックスタート等、ヒトやモノをつないでもらえることが一番有り難いことであると感じている。

また、学校図書館（絵本）をハブとして国語科や美術科とも連携を図り、教科横断的な学びとなった。教科の特質や育成すべき資質・能力を明確にした上で、横断的に学びを広げ、他教科と連携し、それぞれ関連させることで学びを深め、教科のねらいの達成につなげていくことが可能になると考える。

第二次　触れ合い体験の様子

(3) 本題材における情報活用能力について

今回、紙の資料とタブレット PC の両方を準備した。授業者からはあえて指定はせず、生徒自身に選択させた。本題材においては、情報活用能力の育成に向けて、幼児の発達について適切な情報を集める活動、調べたことをワークシートに工夫してまとめ整理する活動、幼児の発達について整理した情報やなぜその絵本を選書したのか、根拠とともに自分の考えを他者に伝え、表現・発信する活動を行った。

氾濫している情報の中から最適な情報を自ら判断して取捨選択する力は今後ますます求められると考える。授業のねらいに沿った資料を教員が用意する場合もあれば、生徒が一から探す場合もある。いずれにしても授業者は授業のねらいや時数等を考慮し、最適な方法を選択するべきであると考える。

3.　成果と課題

一番の成果は学校図書館を中核に、他教科、保育園、NPO がつながり、横断的な学びができたことである。また、絵本を用いたことで、生徒は幼児の個人差を意識しながら幼児の発達について捉えるとともに、絵本を介して幼児との交流を深めることができ、教科のねらいの達成につなげることができた。

課題は学校図書館を活用したことでどのような学びの成長が見られたか、学習成果を可視化する手立てが確立できていないことである。少ない時数の中で学びの深まりを確かなものにし、学びを次に生かしていくために、生徒も学校図書館も成長を実感できる評価の在り方を模索していきたい。

4.　今後に向けて

将来の予測が困難な VUCA の時代と言われている中、新しい時代や変化に対応できる学習活動を行いたいと考えている。現在、一人一台端末が導入され、デジタルデバイスを有効活用していく過渡期にある。機器の活用だけにとどまるのではなく、情報であふれている現代の社会において、教育活動全般を通して、適切に情報を選択するといった、必要な情報を収集、整理、分析、表現する力や多角的に情報を検討しようとする態度を育成することは急務である。こちらが与えた資料の中から情報を選択させるだけでなく、生徒が自ら必要な情報を主体的に選び取る力を育成することも求められるであろう。

学校図書館が今後の社会の変化に主体的に対応し、「学校教育の中核」たる役割を果たしていくために、学校図書館全体計画に基づき，教職員が連携し、計画的・組織的な運営をしていくことが大切になると考える。求められる学校図書館作りに向けて司書教諭としてできることを今後も考えていきたい。

②東京学芸大学附属世田谷中学校

「ハブとしての学校図書館をどうつくっていけるのか」

報告者 教諭：国語科　渡邉　裕

まず今回の実践報告の土台を確認したい。本事業の取り組みにあたり、「(学校研究主題にも含まれる)『情報活用能力』に、『学校図書館』の位置づけ・機能ということに再照射」することに着目した。具体的には「学校図書館をハブとした教科横断・教科連携を『資質・能力』の育成の視点から捉える」ことをねらいとしている。このような取り組みを束ねるものが「情報の入り口としての学校図書館活用」であり、多様な「読書材」を扱うなかでの学びの有用性の実践研究を行った。これはまた、「個々の領域の持つ特性や蓄積の活用・充実・深化（コンテンツをベースにした分析)」と「汎用的スキルの活用や深まりを促す方法の検討　（コンピテンシーをベースにした分析)」と捉えることもできる。

このことから改めて考えてみた点が「ハブ」についてである。学校図書館活用に関わる場面で多く用いられる語であるからこそ、再度立ち止まり考えてみたい。学校図書館が「ハブ」として機能するには、そのイメージが共有されていることが重要であろう。土台を共有することにつながるこの視点があたりまえになりすぎた故に薄れてしまっているようにも感じられる。あらためて「『ハブ』とは一体何なのか」を「どのような特徴を有しているのか」「どのような役割を果たすのか」ということから考えてみる。また、この「ハブ」という語が他の分野でも用いられるものであれば、その分野の成果を援用することも期待できよう。この視点から見てみると、情報技術や物流の分野での使用が把握できる。これらの分野と比べてみるとネットワーク形成という共通性が見えてくる。「ネットワーク」ということについては、令和２年度の事業報告でも「図書館ネットワークの活用」という要素に着目した報告を行った。現在的な課題と授業実践を接続していく上で「ネットワーク」という視点は重要なものになるのではないか。

次に情報技術と物流それぞれの分野での取り組みを参照しながら活用の視点を抽出してみたい。「ハブ」の基本概念として「接続」が土台にある。そのうえで情報技術の視点での「ハブ」という捉えでは、双方向性という特性があることを再確認できる。ここから「複数箇所との接続」、「伝達・共有性」、「双方向性」の三点が特徴として考えられるが、この観点を授業連携・支援の視点にどれだけ反映できているかを見直してみることにより、コンピテンシーベースの分析を検討する要素が見えてくるのではないか。この特性を踏まえこれまでの学校図書館を活用した取り組みを振り返ってみると、事柄同士の「接続」は意識されていたが「双方向性」の意識やハブを仲立ちとした事柄同士を見ていくことが希薄でなかったかという点が課題として見えてくる。「ハブ」として機能していくためには、一つの教科とのつながりだけでなく、もう一つの対象との結びつきの重要性が指摘できるだろう。

さらに「ハブ」の働きを援用してみると視線はどのような部分に向けられるか。「ハブ」の存在が見られる別例に「ハブアンドスポーク方式」が挙げられる。大きく括ると、複数の起点同士を結び付けるときにハブを設定することでスポークにあたる部分が整理され、「効率的な」移動が行えるというものと考える。この方式の特長は「つながり方」や「流れ」に着目した効果・働きかけであると言えるのではないか。この点を踏まえるとハブの役割として、“よりよい” 接続を、目的に照らしたうえでの効果・効率化という点に見ることができる。しかしここには当然メリット・デメリットが存在する。先述の通り同様の要素を持つからこそ、この方式の「デメリット」の部分については学校図書館が「使われない」という課題についての検討要素を見出すことができるかもしれない。「要素」や「機能」への着目は、その視点を持つことで活用の入り口をいかにつくるかという切り口の把握につながっていく。これをもとに再度物流

と授業の視点を結び付けてみる。物流については、大和物流株式会社 HP よりそのメリット・デメリットを示したものを引用した。そこから授業とのつながりを検討すると、図 1 のような事柄を挙げることができるのではなかろうか。デメリットの点にも今後の実践研究の糸口となるものがあると考える。そこから注目する「自分でやったほうがはやい／特につかわなくてもできる」というような指摘については、ハブとしての機能ということをもとに、今後働きかけの具体を検討していきたい。

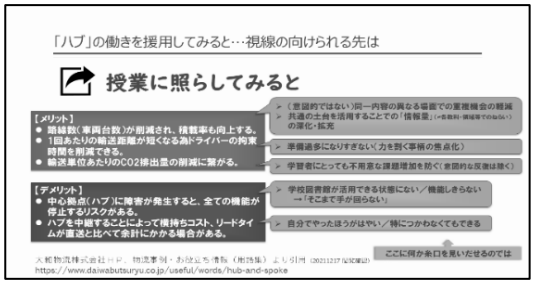


図 1

このように「ハブ」の特性をとらえたうえで、大切な観点として「接続」のみに注視すべきではないということ、学校教育においてはハブの経由が必須ではないことも指摘しておく。これまで見たことは「つながり方」や「流れ」に着目した効果・働きかけであり、「輸送量」（情報量）や移動に関わる結びつきをいかに円滑にするのか、強固にしていくのかという方向からのアプローチであった。しかし、「モノ」の移動だけなされても経路だけ整備されても不十分であり、個々の起点の強化・充実がなされないと「モノ」の活用は行えない。だからこそ授業実践への転用を考えていくときには、個々の領域の持つ特性や蓄積の活用・充実・深化が不可欠である。単につながりをつくるのではなく、教科としても学校図書館としても、その取り組みを充実させていくことが重要である。

図 2

今年度、授業実践に照らして「資質・能力」をとらえる視点として“コードとモード”という考え方を見出した。実際の授業例は、本報告の前項の家庭科での取り組みを参照してもらいたいが、「コード」（要素）と「モード」（様式）の捉え方をしていくことで、関連要素へ転用（コード化）とそれぞれの様式（モード）で表出から具体を検討し、「授業連携場面では学校図書館は『コード化』する（コードの提供）」ということを示すことができる。そのつながりを示したのが図 2 である。「授業連携」という場面において学校図書館が様々な箇所と接続が可能になることは、この「コード化」の働きとしてみると、それぞれの場面での捉え方を具体化できるだろう。別の場面では、当然学校図書館のモード（様式）とその表出が行われていく。

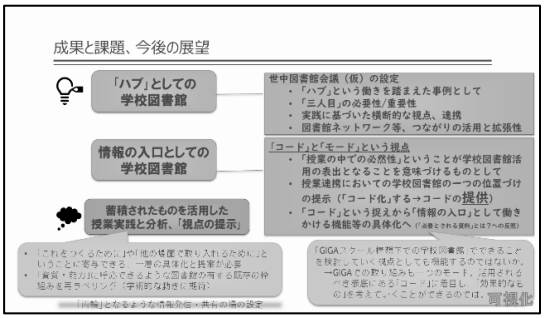


図 3

最後に、今年度の取り組みと成果と課題は、「ハブとしての学校図書館」「情報の入り口としての学校図書館」という点に着目している。紙面の都合により報告会で示したスライドのみを図 3 に提示する。今年度の取り組みをもとに継続する課題となる、蓄積されたものを活用した授業実践と分析、視点の提示について今後さらに検討を重ねていきたい。

【引用・参考文献】
・大和物流株式会社 HP「物流事例・お役立ち情報（用語集）」(2021.12.17 閲覧確認)
https://www.daiwabutsuryu.co.jp/useful/words/hub-and-spoke
・きたみりゅうじ『【改訂 5 版】図解でよくわかる ネットワークの重要用語解説』2003.1/2020.4 ソシム株式会社
・ロラン・バルト/山田登世子(訳)『ロランバルト　モード論集』2011.11/2019.2　ちくま学芸文庫
・刈屋大輔『知識ゼロからわかる物流の基本』2018.1/2021.10 ソシム株式会社

②東京学芸大学附属世田谷中学校

「情報の入り口としての学校図書館活用」～必要とされる学校図書館づくりに向けて～

報告者：学校司書　村上 恭子

中学校の学校図書館は、中学生のための専門図書館である。当然、中学生に必要とされることと、中学生に授業をする教員に必要とされることが求められる。中学生に必要とされるには、旬の本が必要だ。今という時代を感じさせてくれる資料があるからこそ、図書館にやってくる。一方で、図書館にあるべき「読み継がれてきた資料」や、広い意味で「学びに役立つ資料」が、蔵書に厚みをもたらし、授業での活用が進む。加えて図書館には、その後ろに強力なネットワークが存在し、資料提供を支えている。授業での利用の際は、自館の資料だけでなく、近隣の公共図書館からの団体貸出、週に1度の附属学校間を回る学内便を利用した貸出、時には大学図書館に論文の複写を依頼し、資料を準備する。図書館でWi-Fi が使えるようになり、デジタル資料にもアクセスが可能になったことで、学校図書館の守備範囲は大きく広がり、先生がたにも授業に必要な場所として認知されるようになってきた。

常駐する学校司書としては、利用者の声に耳を傾け、全体のバランスを考えながら蔵書をつくり、個々の本の魅力を伝えることで、生徒に読書習慣の継続、あるいは読書の楽しさを実感してもらいたいと願っている。そうは言っても、行動半径が広がり、新たな興味や関心が生まれるこの時期、忙しさもあって、中学生の多くが、読書から遠ざかりがちだ。感受性豊かな十代にこそ読んでほしい本がたくさんある。それらの本に出合える機会をもたらしてくれるのが、授業での学校図書館活用なのだ。だからこそ、司書として最大限の協力を惜しまない…それが多くの司書の想いではないだろうか。

字が読めるようになれば、「本」も読めると思われがちだが、日頃から活字に親しむ習慣や、読むためのスキルも必要だ。何より知識や経験がなければ、書かれていることを深く理解することは難しい。情報活用能力や言語力の育成は、国語科の守備範囲だとされがちだが、どの教科でも「読むこと」に結びつけた学びは可能となる。繰り返し学校図書館を活用することで、生徒は「読むこと」で得られるものに気づき、「読むこと」に関連した汎用的なスキルも身についていく。

今回の実践に取り組んだ73回生（現3年生）も、入学以来、国語科・社会科・家庭科・保健体育科・英語科で図書館を活用した授業を行ってきた。ただし、2021年のコロナ禍以降は、図書館の使用も制限されたため、いくつかの新しい試みを行った。オンライン授業の必要性もあり、生徒全員が Microsoft Teams のアカウントを使えるようになったのを機に、Microsoft Teams 上に、各学年の図書館を作ってもらった。そこから図書館の発信ができるようになったことは大きい。自宅からも検索が可能になったOPAC を Teams 上から案内して、実際に本を検索してもらうことで、NDC を意識してもらったり、国語科の読書課題を他教科の学びと連動させて行う際も、リアルな図書館にコーナーを設けるだけでなく、OPAC の付加機能を利用し、ネット上でも本を選べるようにした。また、図書館からの配布物を PDF にすることでリンク情報も載せられるようになった。2021年度から導入した電子図書館は、まだその利用のしかたは模索中だが、書籍に関しても、紙媒体も電子媒体も使える環境を整えること自体は今の時代には必要だと感じている。

コロナ禍で早まった一人一台の端末の普及と高速 Wi-Fi 環境は、学校図書館の機能を拡張してくれたと捉えることもできる。デジタルへの入り口となり、同時にリアルな本にもつないでくれる学校図書館は、GIGA スクール構想の実現を支え、子どもたちの学びを支援できる場所として、“みんなで使う！”広い意味での学びの場であってほしいと思う。

③東京学芸大学附属国際中等教育学校

「中学校技術科における学校図書館の問題解決を通した知識・技能の習得を目指す授業実践」

報告者　司書教諭：技術科　渡津 光司、学校司書　渡邊 有理子

中学校技術・家庭技術分野(以下、中学校技術科とする)では、題材を通した問題解決の学習が重視されている。また、中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説技術・家庭編(以下、解説とする)には中学校技術科の学習過程が示されており、「既存の技術の理解」「課題の設定」「技術に関する科学的な理解に基づいた設計・計画」「課題解決に向けた製作・制作・育成」「成果の評価」「次の問題の解決の視点」の流れで学習を進めることが想定されている。前述した学習過程は三つの要素で構成されており、「既存の技術の理解」は「生活や社会を支える技術」の要素、「課題の設定」「技術に関する科学的な理解に基づいた設計・計画」「課題解決に向けた製作・制作・育成」「成果の評価」は「技術による問題の解決」の要素、「次の問題の解決の視点」は「社会の発展と技術」の要素となっている。

これらのことから、題材を通した問題解決の学習における最初の学習過程は、「生活や社会を支える技術」の要素をもつ「既存の技術の理解」である。このことについては、解説に「技術に関する原理や法則、基礎的な技術の仕組みを理解するとともに、技術の見方・考え方に気付く」と示されており、学習活動として、「生活や社会を支えている技術について調べる活動など」と示されているものの、その具体的な方法については明示されていない。

本報告では、中学校技術科の内容 A「材料と加工の技術」の学習における「生活や社会を支える技術」の要素が設定されている「既存の技術の理解」の学習過程に焦点を当てた授業実践について報告するものとする。具体的には、教員が先行して取り組んだ問題解決のプロセスを生徒に追体験させることを通して、今後の問題解決の学習に必要な知識・技能を系統的に習得できる授業実践を提案する。

問題解決的な学習を促進できそうな教材として、本授業実践では国産ヒノキ合板の規格材を選定した。本教材の断面図を図 1 に示す。図 1 の通り、本教材は合板でできており、3 種類の規格で構成されている。左から厚さ 12mm、幅 12mm の 1×1 材、厚さ 12mm、幅 24mm の 1×2 材、厚さ 12mm、幅 36mm の 1×3 材となっている。

本授業実践では、問題解決の対象として、学校図書館における展示型ブックスタンドを取り上げた。学校図書館における書籍のサイズや厚み、展示の方法等を学校司書とともに調査・検討し、学校図書館に最適な展示型ブックスタンドを探究・創造するような問題解決のプロセスを生徒に追体験させた。教員が設計・製作した展示型ブックスタンドの作品例を図 2 に示す。

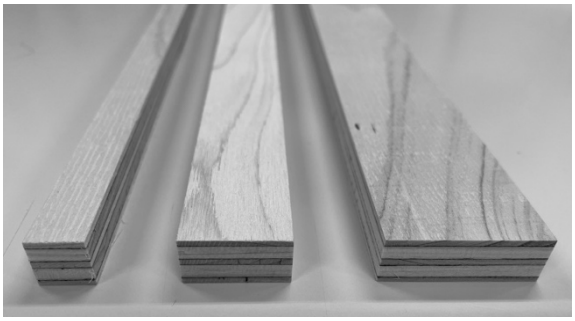


図 1 合板の規格材の断面図

本作品は、1×1 材 3 本、1×2 材 4 本、1×3 材 2 本(長さ 600mm)で構成されている。これらの材料で設計・製作し、接合には酢酸ビニル樹脂系エマルション形接着剤のみを使用した。

本授業実践の対象は、本校第 1 学年 107 名(男子 34 名、女子 73 名)とした。実施時期は、2021 年 4

月～7 月、9 月～10 月とした。題材指導計画を表 1 に示す。第 1 時では、既存の製品における展示型ブックスタンドを調べる活動を行い、木材に限らず、市販品としてどのような展示型ブックスタンドがあるのか調査した。それぞれの製品にはメリットやデメリットがあり、問題解決の工夫があることに気付くことができた。第 2 時では、学校司書より、学校図書館に関して実際に困っている点の講話を聴き、学校図書館における問題点を把握した。現在、学校図書館で展示型ブックスタンドとして使用しているものは、100 円均一で購入した皿置きやブックエンドを代用しており、用途に合っていないものを使用しているため書籍が傷んでしまうといった問題を抱えていることを知ることができた。第 3、4 時では、展示型ブックスタンドに使用されている主な材料である木材、金属、プラスチックの特徴について調べる活動を行った。学習の方法として、3～4 人のグループを構成し、それぞれ木材、金属、プラスチックについて調べたことをプレゼンテーションソフトでまとめ、発表してもらった。第 5、6 時では、展示型ブックスタンドに使用されている材料について、さらに調べる活動を行い、今回の製作に用いる合板と、接合で使用する接着剤について調査した。第 3、4 時と同様に、3～4 人グループを構成し、それぞれ合板、接着剤の特徴について調べたことをプレゼンテーションソフトでまとめ、発表してもらった。第 7 時では、製品を丈夫にする方法として、「構造を丈夫にする方法」や「部材を丈夫にする方法」を学習した。それぞれの工夫が、教員の製作した展示型ブックスタンドのどの部分に利用されているかについて全員で共有を図った。第 8 時では、製品を丈夫にする方法として、接合方法に着目し、接着剤による圧着(圧締)について学習した。第 9、10 時では、3DCAD による展示型ブックスタンドを設計する活動を行った。基本設計は図 2 に示す通りであり、書籍のサイズに合わせて、幅と高さについては変更してよいものとした。学校図書館に出向き、実際に展示したい書籍の寸法を確認する生徒もいた。第 11～15 時では、実際に展示型ブックスタンドを製作し、完成を目指した。第 16 時では、展示型ブックスタンドを評価するために、学校図書館において実際に使用されている様子を確認し、学校司書の講話を聴いた。展示型ブックスタンドの使用例を図 3 に示す。

図 2 展示型ブックスタンドの作品例

表 1 本授業実践における題材指導計画

時数	学習活動・学習内容
1	既存の製品における展示型ブックスタンドの調査
1	学校司書の講話と図書の種類・寸法調査
2	主要な材料(木材、金属、プラスチック)の調査及び発表
2	合板、接着剤の調査及び発表
1	製品を丈夫にする方法の理解
1	接着剤における圧着(圧締)の重要性の理解
2	3DCAD による展示型ブックスタンドの設計
1	展示型ブックスタンドの製作(けがき)
2	展示型ブックスタンドの製作(切断)
2	展示型ブックスタンドの製作(組立)
1	展示型ブックスタンドの評価と学校司書の講話

図 3 展示型ブックスタンドの使用例

本授業実践を通して、中学校技術科における問題解決の学習として、教員の追体験を取り入れた教材である、学校図書館における展示型ブックスタンドという教材を開発することができた。ほとんどの生徒が高い水準で知識・技能を習得したと感じることができた。今後の課題として、生徒の知識・技能が実際にどの程度身に付いたかについて評価したい。

■事業委員による授業実践報告の指導・助言

帝京大学教育学部教授　鎌田 和宏

〇附属世田谷小学校の授業実践

文部科学省の研究開発学校の指定を受けている学校での実践研究である。教育課程自体を直接追試するというわけにはいかないが、探究的な学習を重視する教育活動の中での学校図書館の役割を考える中では示唆に富む実践報告であったかと思われる。梅田先生の実践報告の中で、情報源の特性に応じ学習者に自覚されるような情報活用がなされるようになっていったことについて評価したい。同校の以前の報告に「情報活用能力の一覧表」があり、今回もそれについて触れられていたが、新たな学校デザインの中での果たす役割については十分展開できていなかったように思われる。情報活用能力については全校で必要とされる能力であるとされていたが、学校全体としてどのように取り組まれているのか、そして、その中で金澤司書を擁する学校図書館の活用がどのような役割を担っているのかを明らかにし、ご報告いただくことを期待している。

〇附属世田谷中学校の授業実践

新型コロナウイルスの感染拡大下で DX 化を果たし、従来のネットワーク機能を有している附属世田谷中学校の学校図書館が「中学生のための専門図書館」（生徒にとって・教師にとって）であることを強調していることが印象的だった。その学校・生徒・教師をよく知る村上司書がリーダーシップを発揮して創る学校図書館コレクションが「厚み」のある資料提供をしているということも重要だろう。

関野先生（家庭科・司書教諭）には、前任の横浜市での学校司書配置の事情についても報告いただき参考になった。家庭科の保育領域の実践について報告いただいたが、この領域の学校図書館活用の実践は豊富化しつつあり、幼児に関わる体験活動をめざして絵本を活用した授業の有効性をさらに明らかにしていただいた。

渡邉先生（国語科）の報告は、夏の事業委員会の研修会での報告に続き学校図書館の役割について深めようとするものだと受け取った。ハブとしての学校図書館との整理は興味深いが、情報の通過点としての機能とのとらえでよいかについては、検討する必要があるように思われる。特性に応じた個別の深化との指摘をされているが、専門職が配置されていることの意味をどう位置付けるのかを深めつつ、さらなる実践報告を期待したい。

〇附属大泉国際中等教育学校の授業実践

国際バカロレア一貫教育を実践する初の国立学校である同校の学校図書館の役割については強い興味をもっていたが、技術科の渡津先生（司書教諭）の実践報告を聞けたことは中学校の IB 校ということを除外しても貴重であった。生徒たちが日常的に利用している学校図書館が必要としている面展示書架をつくるという技術科の問題解決的学習の実践報告であった。渡邊司書への聞き取りと学校図書館の実地調査を行い、調査材料の調査・加工方法（材料特性の把握、接合方法、接着）等で多様な資料を活用し、実際の製作が行われたすぐれた実践であった。生徒たちが製作したものが図書館で実際に使われているところをみている表情とアンケート結果に、探究的なものづくり実践の手応えが読み取れた。

本年度も好実践の報告であり、事業委の DX 化の取り組みも重要であった。例年、司書教諭・学校司書の活躍についてはよくわかるが、それぞれの学校全体としてはどうなのか知りたく思う。是非とも次なる報告では学校としての取り組みがどうなっているのかについてもご報告いただきたい。

埼玉県立久喜図書館　司書　長谷川 優子

私は図書館現場の司書として、本事業のもう一つの側面であり、授業実践成果の基盤とも言える『先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース』を中心に紹介します。本データベースの進展と足並みを揃えるかのように、小中学校図書館の読書環境は着々と整備され、子どもたちと本との様々な出会いの工夫にあふれた学校図書館が各地でみられるようになりました。特に近年の中学校図書館の変容は、『Shien』30 号[i]（埼玉県立図書館発行）掲載事例のように、学校司書が配置され、授業で活用される学校図書館の姿が、若い世代の司書や司書教諭をめざす学生の中に浸透したことを実感しています。

「データベース」の当初の願い―実践事例を「先端例」とガラスケースにしまうことなく、学校図書館のみの専門用語ではなく、校内の共通語にしたい―は、快く指導案も展開のコツも公開して下さった実践者をはじめ関係者の方々の力によって、ここに叶ったと深く感謝申し上げます。

しかし一方、『Shien』30 号が紹介した各中学校の図書館現場からも、新たな不安の声が読み取れます。GIGA スクール構想の急速な展開に伴い、「昼休みの利用が激減した」、「英語や総合での調べものもタブレットを使い PowerPoint での発表という形になった」と生徒の情報行動の変化が読み取れます。全国的にも、学校図書館での学習活動の変化を、「校内の教育基盤システムへのアクセス権限がなく、授業に向けた広報が困難になった」、調べ学習の実績のある学校からも、「学校図書館のコレクションは、探究活動の中核から外れた」と、学校図書館の基盤そのものへの不安や、今後どう進むべきか迷いの声が届くようになりました。

そういった中で、早速に本データベースは 2021 年 10 月、実践事例の紹介をもって、その不安への回答と言える方向性を示してくれました。詳しくは、杉並区立桃井第三小学校の事例をお読みいただきたいのですが、平成 25 年からのタブレット導入を契機とし、生徒の情報リテラシー育成を核とした情報担当教諭と学校司書との協働、図書以外のメディアも積極的な評価し活用する展開、そして学校図書館の全体計画に加え、今後より重要となる「情報活用能力育成計画」の全校的共有と、今後の各校にとって、ヒントとなる指針を公開されました。長年の取組みの蓄積に裏付けられた明確な方向性です。

続く 12 月には、世田谷区立桜丘中学校図書館の ICT と本とを活用したハイブリッドな学びの場であり、人権教育に向け外部の情報提供機関「東京都人権プラザ」と教室とを立体的につなぐ外界への窓となる学校図書館の在り方を示してくれました。もともと学校図書館のコレクションは、所蔵資料のみならず、デジタルも Web 情報源も、そして地域社会の人材や情報も包含するものだと。「データベース」がこのように時宜に適った事例を的確に選び伝える取材と分析は、学校図書館現場の実践者ならではのものです。本データベースの存在は、学校現場のみならず、新たな学校図書館像を模索する未来の先生たちをも支える代表的なツールとなっており、これからもそうあり続けてほしいと願います。

今回も、附属各校から多様で先進的な学校図書館活用デザインの実践が報告されました。その成果の礎には「データベース」を形成維持し続ける、各校の学校司書と司書教諭の方々の、理想的な研究と実践の循環があることを申し添えたいと思います。

今後もどうぞ、学校図書館の未来を支える本データベースにご支援頂ければと存じます。

---

[1] 子ども読書支援情報誌『Shien』第 30 号
https://www.lib.pref.saitama.jp/guide/docs/a197c2fb2add21e60d414a9b32f90f76.pdf

専修大学文学部教授　野口 武悟

附属各校の司書教諭、学校司書をはじめ、本事業の実施に関わるすべてのみなさん、一年間本当にお疲れさまでした。

本年度の事業報告会は、2021 年 12 月 18 日にオンラインで開催されました。ここ 2 年ほど本務校のインターンシップ報告会等と日程が重なってしまいリアルタイムでの参加がかないませんでしたので、今回は久しぶりの参加となりました。参加して改めて思うことは、実に学ぶこと、気づかされることの多い報告会だということでした。

今回の事業報告会では、附属 3 校（世田谷小学校、世田谷中学校、国際中等教育学校）の実践研究の成果が発表されました。いずれの成果も、今後の学校図書館活用を考え、実践するうえで示唆に富むものばかりでした。「GIGA スクール構想」が推進されるなか、全国の多くの司書教諭や学校司書にとって、学校図書館がそこにどうコミットしていけるのかが大きな関心事となっています。附属世田谷小学校では、インターネットで活用できる環境への「メディアルーム」（学校図書館）の改造を進めています。学校図書館をハブにすることで、「インターネット上の質の高い情報へのアクセスを促す」ことができるという梅田先生の言葉が印象的でした。附属世田谷中学校では、一人一台端末の時代だからこそ、「リアルな学校図書館を多様な学びの空間に」（村上司書）しようと環境づくりに取り組んでいます。環境だけでなく活用も学校図書館をハブとして広がっていくことが重要ですし、可能です。このハブについての渡邉先生の深い考察にはまさに目から鱗が落ちました。ぜひ論文化してほしいと思いました。附属国際中等教育学校からは、渡津先生が学校図書館を活用した授業を紹介されました。技術科の授業での活用というところがポイントでしょう。学校図書館活用 DB を見ても、国語や社会、総合的な学習（探究）は比較的活用事例が多いですが、技術科を含めてまだ少ない教科・領域もたくさんあります。こうした教科・領域での活用事例の蓄積が期待されます。

ところで、学校図書館を活用した授業を学校全体で推進しようとするならば、文部科学省の「学校図書館ガイドライン」（平成 28 年通知）に示されているように、学校図書館の学校経営計画・方針や校務分掌への位置づけ、学校図書館の運営と活用に関する各種計画の策定、そして評価・改善などの学校図書館マネジメント（PDCA）が重要になってきます。これまでの本事業での附属各校の授業実践の発表に際しては、学校司書との関わりはよく伝わってくるのですが、学校図書館マネジメントに関わる内容があまり見えてきません。どのような計画を立てて、どのような組織のもとで、どのようにすぐれた授業実践を支えているのか。この点を明らかにしていくことは、これから学校図書館の整備・充実と活用を一層推進していこうとする全国の多くの学校にとって参考になることは間違いありません。ぜひ、来年度以降の本事業の展開においては、この点も意識していただき、実践研究を進めてほしいと期待しています。

なお、事業報告会当日の私のコメントのなかでは、ここまで述べてきたことのほかに、参加者への話題提供として「GIGA スクール構想関連の動向について：電子書籍の提供を中心に」という話もいたしました。しかし、紙幅の関係もあり、本稿では割愛いたしますこと、ご了承ください。

白百合女子大学基礎教育センター准教授　今井 福司

私は今回の報告会で各学校の授業実践を伺う際に、新型コロナウイルス感染症以後の学校図書館活動の展開ができているかを意識して拝聴していた。2020 年については休校措置の影響によって、活動が停滞したと報告する事例が多くあった。2021 年も集合や対面での活動が制限された場合も少なくないことから、引き続き停滞した学校もあったかと思われるが、東京学芸大学附属学校の実践を見る限りでは、そのような心配は杞憂に終わったと考える。

そして単に展開できていただけでなく、きちんとこれまでの蓄積を踏まえつつ、レベルの高い実践が提供できていたことは非常に興味深かった。学校図書館の実践は素晴らしい実践が報告されても、担当者が変わったり、環境が変わったりしてしまうと、それまでの蓄積が全てリセットされてしまうことが少なくない。良い事例が過去の事例となってしまうのは、学校図書館業界の問題だと私は感じていた。いつになっても「初心者向け」の実践しか展開されないのではとも懸念していたこともある。その懸念については、報告会でも申しあげたが、「リセットしない」学校図書館の実践を久しぶりに拝見できたことで払拭された。大学で学校図書館を教えるようになって、17 年ほどになるが、その際に前提としている学校図書館実践のレベルやベースラインを引き上げられるような情報が今回の報告会には多く示されていたと考えている。

それぞれの実践が、他の研究会や学会などで既に発表されていたことも良い方向に働いていた。授業実践の報告は、実践の魅力を紹介しようとするあまり、実際に行った活動のみを紹介してしまい、その背景となる学習指導要領や理論などをあまり紹介しない場合もある。今回の事例は他の研究会や学会で発表したこともあってか、背景情報がバランス良く扱われ、なぜその活動が行われたのか、何を意図していたのかが分かりやすく取り上げられていた。それも一つの事例だけでなく、どの事例もそうしたことが意識されていたことは特筆すべき事項である。むしろ学校教育の現在置かれている状況やトレンドを意識して理解していないと、何が扱われているのかが分からなくなるのでは思うほど、背景情報が豊かに取り上げられていた点は高く評価すべきだと考えている。

今回取り上げられた授業実践については、追加で指摘すべきすることは見当たらなかったが、敢えて何か指摘するとしたら 2 つ挙げられる。

1 つめは扱っている事例と児童生徒のレベルが合っているかということである。どの実践でも、学校図書館を活用している児童生徒の様子が描かれていたが、こうした状況について行けない児童生徒はいなかったか、逆に使いこなしすぎていて教職員が提供する題材が低レベルに見えてしまうような児童生徒はいなかったかが気にかかった。もちろん授業に携わる教職員であれば、真っ先に配慮している事項であると思われる。それでも、魅力的に事例が描かれれば描かれるほど、こうした動きに対応できていない児童生徒の存在や、それに対する対応はどうなっているかは今後指摘していただけると良いのではと考える。

2 つめはコレクションの問題である。今回扱われた情報メディアは印刷媒体と電子情報の両方が含まれていたが、出版不況や学習に役立つとされる資料の出版が行われにくくなったという報告がされている中で、実際の現場にはどの程度の影響があったのか、あるいはそのような問題はまだ顕在化していないのかについては、どこかで触れる機会があればと思う。

ただ、こうした点はあくまでも蛇足だとも考える。今回の報告会の映像は大学の授業の教材として、活用できるほどの内容だと考えている。一人でも多くの方にこの報告会の内容が伝われば良いと事業委員の一人として強く願っている。

（２）学校司書のための研修プログラムの企画・実施・効果の検証

1）学校司書に役立つ研修の実施

令和３年７月 29 日（木）	「選書」	きむら ともお氏　ハコブネ×ブックス主宰 衛藤 北斗氏　世田谷区立瀬田中学校司書
令和３年７月 30 日（金）	「GIGA スクール構想と学校図書館」	鎌田 和宏氏　帝京大学教授 渡邉 裕氏　　附属世田谷中学校教諭

令和３年度は、研修はオンラインで行うことを前提に企画を考えた。テーマは、すべての学校司書にとって関心が高く普遍的な「選書」と、幅広い層にも参加を呼びかけられ、かつタイムリーな「GIGA スクールと学校図書館」とした。夏休み中の２日間に実施することにした。

「選書」は、児童文学作品やヤングアダルト作品に明るいきむら氏と、中学校の学校図書館に勤務されている司書、衛藤氏に“イマドキ中学生男子のニーズ”を伺いたいと講師を依頼した。「GIGA スクール構想と学校図書館」は、司書教諭、教科教諭と一緒に受講できることを意識し、事業委員をお願いしている帝京大学教育学部教授の鎌田和宏先生と、東京学芸大学附属世田谷中学校教諭で、2009 年のデータベース立ち上げから、授業実践に取り組んでいる渡邉先生に依頼した。それぞれ募集定員を 80 名にしたが、数日で定員に達したため、参加できなかった方のために、見逃し配信も８月末まで行った。結果 250 人を超える申し込みがあり、関心の高さが裏付けられた。

2）研修アンケートの分析

見逃し配信で視聴された方からのアンケートも含め分析した。

「選書」（アンケート回収数 131）

適合度（充分適していた＋適していた）	99.2%
理解度（充分理解できた＋理解できた）	98.5%
満足度（充分満足できた＋満足できた）	99.2%
実践度（とても活かせる＋活かせる）	98.5%

どの指標も、高い数値が示された。特に実践度に関しては、令和元年度に行った夏の研修では、49%だったものが、今回は選書に関しては 98.5%という高評価であった。研修を企画した附属学校司書にとっても有意義な研修となった。

またお二人の講師からは、立場の違う話が新鮮で得るものも多く、さらに対談を設けたことで互いに充実した時間を持つことができた、と言っていただけたことも印象的だった。

▼アンケート自由記述から

- 選書の大切さを実感できることができた研修会だった。選書眼を養うためには、たくさんの本を読むことが重要であることを再確認した。そして、ただたくさん読むだけではなく、読んだ本についてファイリングをしておくことの重要性を感じることができた。また、児童生徒のニーズにあった選書を行う必要がある。そのためには、児童生徒のことをよく知ることも必要である。
- 学校司書は一人職場なので、自ら学んでいかなければならない、そんな時にこのような研修はとてもありがたい。コロナの影響で研修の機会が減っている中、すぐに職場で役立てられる研修はありがたい。今回のようにオンラインで開催される研修は、地方からも参加できるのでありがたい。
- 立場の異なるお二人に、それぞれの選書についての考えをお話しいただいたので、興味深くお話を伺うことができた研修となった。

- アンテナを高くし情報を得る。情報交換をすることで選書の幅を広げることができる。
- 地方だと東京での研修に参加することは難しい。今回のようなオンラインでの研修はありがたい。
- 教科横断的な選書を意識するということになるほどと思った。

「GIGA スクール構想と学校図書館」（アンケート回収数 121）

適合度（充分適していた＋適していた）	99.2%
理解度（充分理解できた＋理解できた）	93.3%
満足度（充分満足できた＋満足できた）	96.7%
実践度（とても活かせる＋活かせる）	93.4%

こちらも、すべて 90%台の高評価を得ることができた。アンケートに答えてくださった方の内訳を見ると、20%が学校司書以外の職種だった。また、申し込みは学校司書だが、教員と一緒に学校から参加された方もいた。学校全体の運営にも関わるテーマだけに、今後も教員と参加できる内容の研修の必要性を強く感じた。

▼アンケート自由記述から

- 紙 vs ネットではなく、両方の長所を上手く活用してより良い調べ学習ができるような学校図書館を作っていきたい。
- 自分の中で「知らなかったこと」「知っておくべきこと」を可視化することができた。
- 「ハイブリッド」な図書館づくりを目指す指針となった。
- デジタル・パスファインダーを用意し、情報の「可視化」を心に留めて、「人」がいて「個別情報化」された学校図書館で、読書に親しんだ子たちが情報活用能力を発揮してくれるよう、先生たちと協力していきたい。
- 国語科の教員として 10 年目の経験から、実際の活用の仕方自体は、教科の中で揉んでいかなければいけないものだと思う。目指すもの、求められている姿がより明確化したので、さらに気を引き締めて教科指導を模索していきたいと考えた。
- 一人一台のタブレットがあるとはいえ、子どもたちは資料を探しに来る。それに応えられるよう、引き出しを増やすとともに、子どもたちの発想力をサポートできるよう、今、どんな資料があるのか、再度まとめてみようと思う。
- 鎌田先生の話を伺い、すでに稼働している学校図書館 Classroom などでパスファインダーの公開を検討しようと考えた。
- 渡邉先生の具体的な実践の話にたくさんのヒントをいただいた。
- ICT 活用自体が社会的に必要なスキルであるとともに、やはりそれを使わなければならない。目指す学びを実現するためのツールとして使うということ、そして ICT 活用に付随してこれまで以上に情報の選択・評価のしかたを身につけることが重要になるということをしっかり理解することができた。
- 現時点では、学校の DX 化でまだ不十分なところを進めていくこと、そして、情報評価の指導・支援をこれまで以上に進めていくことが自分の中では直近の課題と理解した。
- 高校は情報科もあるので、どうしたらうまく連携していけるかなという点も以前から考えている。
- 「年間指導計画を立てるときに、教科や学年の先生と一緒に考える」というアドバイスにより、こちら側が閉鎖的な面もあったのではと気がつくことができた。
- 見逃し配信をしていただいたので、大変ありがたかった。スライドを止めてゆっくり見ることも、元のサイトを確認しながら見ることもでき、学びが深まった。

- 「可視化する」「『つながり』をどうつくるか～授業との連携」「実際に『使い続ける人』の存在の重要性」などの言葉が心に残った。
- タブレット端末と協働する図書館等、環境整備を含めハードルが高く感じた。
- 「インターネット検索の手引き」のようなものを作ろうと思っている。and 検索や or 検索の仕方や、学習に役立つリンク集、そしてインターネット学習における著作権の問題など、いろいろ調べたり聞いたりしたことを参考にまとめ、先生方に配る予定。
- 簡単に「情報を集めて」と以前から教科書等に記載されているが、集めた「その情報」の信ぴょう性は誰(どこ)によって担保されているのかまで意識して確認させる指導は、現場ではないがしろにされているように感じる。
- 学校図書館が情報センターで、ICT 教育にも関わりがあるということを、上層部に理解してもらうにはどうしたらいいのだろうと、模索中。
- 勤務校でも、先生方は児童に配られたタブレットを、どう使っていくかの研究で、忙しそうにもかかわらず、その研修に司書は参加していないので、意見も言えない現状がある。

3) 考察

「選書」のアンケートに比べ、「GIGA スクール構想と学校図書館」のアンケートでは、非正規パートや複数校の掛け持ち勤務などの雇用の不安定な司書の仕事のしにくさが浮き彫りにされた。「勤務校でも、先生方は児童に配られたタブレットを、どう使っていくかの研究で、忙しそうだが、その研修に司書は参加していないので意見も言えない」「紙と ICT とのハイブリッドな情報センターを目指したいと考えるが、非正規パートの学校司書の力ではかなわぬ夢である」上記のような、司書として行わなければならないことと、実際に学校現場でできることの乖離が目立つ発言が多く見られた。

一方で地域や各学校での格差が教育格差に直結している点も見えてきた。「こちらの自治体では電子書籍どころか資料購入のための予算が年々減り、学校規模によってはポプラディアの紙版すら購入できない。」「都市と地方との格差、自治体による格差は本来あってはいけないもので、社会への入り口である学校図書館はどの児童生徒にも同じレベルで活用できるものであるべきだと思う」　積極的に端末を図書館授業で使用しようとする意見のある一方で、本来であれば、教育格差をなくす目的を持った ICT 活用が十分に学校内で機能していない状況が今年度の研究プロジェクトで見えてきた。

4) 次年度以降の研修～アンケートから見えるニーズ～

本事業の司書部会で作成した「専門的知識・技能を向上させるための司書研修プログラム」を参考にし、今後受講したい科目を研修参加者に答えてもらった。受講希望が一番多かったのは、「情報リテラシー育成支援論・探究的な学びのプロセスと、学校司書による支援／評価のありかた」次に多かったのは、「学校図書館連携・協働論」「利用者ガイダンス論」「読書推進活動論　子どもと本を結ぶ手立てを学ぶ」であった。その他の意見として、著作権について学びたいという声もあった。日頃の業務にすぐに役立つことを学びたいという声が多いように感じた。

コロナ禍で、オンラインの研修が増えているが、地方でも参加できるのでありがたいといった声が聞かれる一方、他の学校の図書館を実際に見る機会が減って残念だという声も聞かれた。今後も感染症の拡大状況を考えながら、司書の学びを止めないように研修を計画していきたい。

■講師のお二人からの寄稿

ハコブネ×ブックス主宰　きむら ともお氏

このたびは本研修企画に講師という立場で参加させていただきまして、ありがとうございました。自分はオンライン書店での本の紹介からはじまって、児童文学評論や自分の児童文学紹介サイトやフリーペーパーなどネットや紙媒体での遠隔でのコミュニケーションを中心に活動をしてまいりました。今回はオンライン講演や配信という形でしたが、チャットや感想などを通じて参加者の方たちからの直接の反応をいただくことができ、大変、参考になりました。同じ子どもの本に関することでも、まったく違うスタンスで活動されている方たちがおり、そうした方たちと広くコミュニケーションすることで世界を広げることができるのではないかという主旨のお話をさせていただきましたが、今回の講演自体がそうした試みであり、自分自身もまた知見を拡げることができたと感じています。特に衛藤先生と司書の方たちが論点とされていたことが、門外漢の自分にとっては非常に新鮮で、翻って自分の立場から何か提案できることや協力できることもあるのではないかと可能性を感じました。子どもたちの読書のために一人で活動されている方たちをネットワーク化する試みとして、今回の研修企画がもたらしたものは大きかったのではないかと思います。自分も参加者の一人として皆さんのお話の輪に加えていただけたような連帯感を抱くことができたのは何よりでした。貴重な機会を与えていただきありがとうございます。

東京都世田谷区立瀬田中学校司書 衛藤 北斗氏

講師としてお話をさせていただく準備をしている時は、総じて一人作業になりやすい。殊に今回の研修は、事前顔合わせも憚られる状況の中進められた。もうお一方の講師はきむらともお氏と伺っていたので、内容については司書の実践に終始すれば重複する事はないという予測は立つ。きむら氏のお話を楽しみに想像しながら、いかにすれば図書館関係者が多い視聴者の心に寄り添えるかという点に重きを置いて内容を考えられたのは幸いだったと言える。

リモート配信ということで、当初は各々が独立して力を発揮すれば良いという考えでいた。ところが事前の憶測は、良い意味で大きく裏切られた。講師が揃って「本を紹介・提供する」「言いようもなくたまらなく本が好き」というベースを有していたために、研修は全体としてリンクし１つの物語の章を分担して朗読しているような感覚を得たのだ。おそらくこれは、きむら氏も、会を運営してくださった学芸大学附属司書の方々も、ご視聴くださった参加者の皆様にも少なからず感じられたであろうと信じる。講師が互いの話を終えた後の座談会という構成も、会をまとめる効果を高めたかもしれない。またリモート研修の良さなのであろうか、休憩時間や質疑応答に交わされたチャットは誤解なく真っ向から答える事ができたように思う。時間内に答えられなかったものも後に回答集をメールで送付できた。私の話の中で紙のカタログ等と併せてインターネットを利用した選書について触れたが、今回の研修そのものが電子と紙の良い面を上手く取り合わせた多様な活用を体現していたように感じられる。本を架け橋として人の営みに触れる者達の息吹が聞こえる、希望に満ちた研修に加われて幸せに思う。

（３）『先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース』の改良と普及

Ⅰ． サイトでの情報発信

表①　事例・記事総数（件）

	授業 実践事例	授業と 学校図書館	読書・情報 リテラシー	今月の 学校図書館	ちょこっと アイデア玉手箱	活かそう 司書のまなび
令和２年度	377	27	50	112	43	10
令和３年度	397（+20）	30（+3）	54（+4）	123（+11）	44（+1）	11(+1)

※学校図書館の日常　（令和４年１月現在）
学校図書館トピックス 115（前年度+11）／よみきかせ 115（+11）／ブックトーク 107（+11）
／広報（お薦め本）108（+11）／レファレンス 104（+11）／テーマ展示 104（+11）

Ⅱ． 校種・教科別事例数

表②　校種・教科別事例数 2009. 11～2022. 1（件）

	小学校			中学校			高校			特別支援	計
	低学年	中学年	高学年	中１	中２	中３	高１	高２	高３		
国語	23(17)	13(11)	13(10)	23(20)	26(22)	14(11)	11(10)	13(10)	6(6)	2	144
社会		6(5)	12(10)	11(8)	6(5)	7(5)	2	7(2)			51
数学		1(1)	1(1)	2(2)	3(3)	2(2)	2(1)	1(1)	1		13
理科		4(3)	9(7)	3(1)	3(1)	1(1)	4(2)	1(1)	2		27
生活科	6(6)										6
音楽	2(1)	4(4)	4(2)	2(2)	2(2)	1(1)	2(2)	3(1)			20
図工	3(2)	1(1)	1(1)				4(4)	3(1)	1		13
保体	1(1)	2(1)		1	1			3(1)			8
技術				1(1)	1(1)	1					3
家庭科			2(1)	5(2)	4(3)	2(2)	1	7(3)	1		22
外国語			1(1)	1	3(2)	2(2)	2(1)	5(1)			14
道徳	2(2)	1(1)	1(1)	3(2)		2(2)					9
総合	4(2)	6(5)	4(2)	4(3)	5(3)	2(2)	1	5(2)	1(1)	6	38
特活	1	8(8)	2(1)							3	14
情報							7(2)				7
その他	3(2)	1			1(1)			1		2	8

注）（）内の数字は、指導案のある事例数を表している。中等教育学校の事例は、中学校、高校に振り分けてカウントしている。
今年度追加された事例のある教科の項目を　　で示している。

Ⅲ. サイトのアクセス数

表③　サイトアクセス数（件）

	令和元年度	令和２年度	令和３年度
累計アクセス数	1,175,094	1,380,804	1,643,716
年間アクセス数	281,656	205,710	262,912

Ⅳ. サイトの案内や広報活動

＊メールマガジンによる発信　通算 127 号（2021 年 12 月末）メルマガ登録者数　633 人

＊SNS 発信

・Twitter　フォロー数　　1013→1372→1654　（令和元年度→令和２年度→令和３年度）

・Facebook　いいね！数　　814→965→982　（令和元年度→令和２年度→令和３年度）

＊本学教育実習生への広報

「実習のてびき」のなかでデータベースの紹介をしている他、各学校でも講話等で案内してきた。今年度も、対面での講話等が行われなかった学校もあり、配布資料や Web オリエンテーションでの広報が主となり、一部来館のあった実習生にのみ直接案内する対応となった。

＊本学学生へのサイト広報

子ども図書館サービス論　第 10 回ブックトーク　講義内にて

＊外部へのサイト広報　（令和３年４月～令和４年１月）

対面での研修会等の延期・中止を受け、記事執筆等の間接的な広報活動が主となった。

時　期	対　象	内　容
4 月	図書館マルシェ 月刊「海外子女教育」2021 年 4 月号	座談会「“レファレンス”と“ブックリスト”のこと教えてください！」に於いて、データベースを紹介 特集記事「学校図書館の魅力」のなかでデータベースを紹介
9 月	日本教育大学協会	研究集会発表資料（附属高等学校　家庭科・司書）
10 月	静岡県浜松市学校図書館補助員研修会	「コロナ禍でも必要とされている学校図書館」の講座にてデータベースを紹介

Ⅴ. 学校図書館向け教材検索システム開発にあたっての実証実験の協力

南山大学人文学部・人類文化学科准教授の浅石卓真氏より、開発中の「学校図書館による授業支援のための教材選定システム（BookReach）」の実証実験への協力を依頼された。同システムの教材提供業務への支援効果の検証、ならびにユーザビリティの評価を行うことが目的であった。

システム開発にあたり、本データベースを活用したこともあって本学附属小・中学校司書へ協力依頼があり、実証実験に参加した。

なお、このシステムには、データベースに上がっている 291 件の実践事例にあるブックリストのデータも使われていることから、いずれは GAKUMOPAC での活用も検討している。

Ⅵ. 今年度の成果と次年度への課題

当サイトへのアクセス数は、ここ数年は開設当初の目標の 2 倍である年間 20 万件を安定的に超えている。また、データベース掲載の事例を発展させた授業実践の報告を各地からいただくこともあり、サイトが学校図書館関係者の間で浸透し、教育現場に一定の役割を果たしていると言えよう。附属学校司書が毎月更新している「学校図書館の日常」ページでは、季節や時事問題・学習単元に即した旬な話題を提供し、どの学校でもすぐに採り入れられる情報を掲載するよう努めている。今年度は附属学校以外からも、小学校から高校まで、普通科や専科・特別支援学校など様々な学校から、独自の視点で記事を寄稿いただいた。学校図書館を授業の中で積極的に活用している様子がよく伝わるそれらの報告は、事業委員会からも高く評価いただいている。

昨年度に引き続き、今年度実施された司書講座や事業報告会などはすべてオンライン開催となったため、当日発表された映像や資料は後日、希望者に配信された。これにより、当日諸事情により参加できなかった方や、参加者から話を聞いてぜひ内容を知りたいと思った希望者も、見逃し配信・追加の情報提供を申し込むことができ、より多くの方々に研修の機会を届けることができた。一方で、これまではサイト内の「司書研修の報告」ページ内で文書データとして残してきたこれらの研修記録が、今年度は更新されずにいる。これはサイトを運営している附属学校司書の業務負担軽減の一環として意図したものではあるが、いずれ見逃し配信等にも閲覧期限を設けることを考えると、今後どのように研修記録を残していくかの検討が必要である。

また、昨年度より附属学校間で試験的に運用されていた学芸大総合 OPAC「GAKUMOPAC」がサイト内で一般公開された。外部の利用者からは「自校での選書の参考にしている。GAKUMOPAC で件名検索すれば、授業に即戦力で役立ちそうな本、しかもある程度信頼の置ける本を探すことができる」という声が寄せられ、GAKUMOPAC が学校図書館関係者にとって業務の一助となり得ることが窺える。附属各校の図書館システムを集約した簡易 OPAC であるので、書誌データの重複など細かな点には目をつぶっていただき、選書をはじめとして各校のニーズに即した柔軟かつ気軽な活用をしていただきたい。

昨今の新型コロナウイルス感染症の流行や GIGA スクール構想により、学校図書館は大きな転換点を迎えている。「図書館に Wi-Fi 環境が整備されていない」「司書に端末が与えられない」等の問題点も多方面から聞こえてくるが、一方でこれまでにない学校図書館活用の在り方を考えるチャンスでもある。電子書籍の広がりやオンライン学習の浸透といった環境下ではもはや紙の資料とデジタル情報とを分けて考えることはできず、それらを使いこなすスキルが学習者・授業者双方に必要となる。学校図書館は今後、学習に有用なオンラインデータベースやウェブサイトの情報も的確に収集し、学習者のみならず授業をおこなう先生方にも提供していくことが求められる。事業委員の複数の先生からも「これからは電子パスファインダーや外部デジタルコンテンツ情報の積極的な利用・提供を」というお声をいただくように、『先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース』もそのプラットフォームとしての役割を果たすべく、GIGA スクール構想の中心に学校図書館を位置づけられるような情報発信を目指していきたい。

■学芸大総合 OPAC（GAKUMOPAC）の公開について

高橋 菜奈子（東京学芸大学附属図書館）

１．はじめに

東京学芸大学学校図書館運営専門委員会では、附属学校 10 校の図書館および大学図書館に所蔵されている蔵書を統一的に検索できる学芸大総合 OPAC を令和 3 年 12 月 13 日にインターネットで公開した。愛称は GAKUMOPAC（ガクモーパック）という。

この取り組みは、令和 2 年春からの新型コロナウイルス感染症拡大により活動を制限された複数の附属学校が㈱カーリルの「COVID-19：学校図書館支援プログラム」の提供を受け、簡易 OPAC を構築したことが契機となっている。同年 8 月 1 日に開催した学校司書講座 2020 でのカーリル代表・吉本龍司氏の講演を経て、令和 3 年 1 月 25 日に㈱カーリルとの協定書を締結し、学芸大総合 OPAC を構築することになった。学校図書館運営専門委員会にて、インターネット公開の合意を形成し、公開に至ったものである。

２．システムの概要

GAKUMOPAC（https://www.u-gakugei.ac.jp/~schoolib/gakumopac/）では、附属学校と大学の計 11 館の蔵書を横断検索でき、検索結果から所蔵館の当該書誌にも飛ぶことができる。加えて、各学校の近隣公共図書館も検索対象にできる。書影が表示されているので分かりやすく、レスポンスも良好であり、使いやすいシステムとなっている。公開にあたっては『先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース』にバナーを設置し、大学図書館のウェブサイトからもリンクを形成した。

３．利用の実際

附属学校間では授業利用に限り、学校間の連絡便で資料を相互貸借している。大学図書館との間も、利用者の直接来館のほか、学校図書館を介した申込みにより連絡便での送付を行っている。学校司書の業務においては、相互貸借のメール連絡の際に書名を検索してから依頼できるので、業務の負担が軽減された。また、膨大な出版物の中から授業に役立ちそうな本を選ぶときに他校の蔵書を参考にするなど、選書のツールとしても活用されている。校外・在宅から検索したり、書影の確認にも役立てたりしている。

児童・生徒も、読みたい本を探すのに活用しており、小学生でも問題なく検索している。帰国生が漢字にルビがふってある小学校向け資料を興味深く探すなど、他校の蔵書検索にも活用されている。授業の課題として使ってもらう事例もでてきており、図書館の大型ディスプレイで提示したり、QR コードを使って生徒各自のスマホに入れるように学校司書から指導したりしている事例もある。一方で、まだ生徒自身が使いこなすところまで浸透していない学校もあった。OPAC 端末が設置されている学校が 10 校中 7 校にとどまっているという実情もある。

今後は一人一台端末で利用してもらうことが課題となる。現状では 10 校中 3 校で学習用端末でも利用している。併せて、図書館で有用なリンク集を提供するなどの取組みが必要となるだろう。

４．おわりに

児童・生徒がいつでもどこでも自校の OPAC 検索ができるようになることは、自ら自由に学びを深める機会の提供である。情報の探し方を習得することのみならず、自校にとどまらない外部に広がる広大な情報資源の存在を知り、 それぞれの知的関心・レベルに合わせた情報を自ら得られることは、探究的な学びの基盤となる。附属学校司書にとっても、資料の相互利用や自館の選書など、業務の効率化につながっている。GIGA スクール構想の展開の中で、図書館蔵書の検索を当たり前のものとし、デジタルと紙のどちらにも対応する学校図書館を目指して、GAKUMOPAC の構築・公開はその第一歩となった。

【資料】

■　附属学校図書館データ一覧

東京学芸大学附属世田谷小学校　メディアルーム　　（令和３年 12 月末現在）

司書教諭　：　梅田　翼	司書　：　金澤　磨樹子（週５日）	
開館時間　：　8:15～16:15	授業での使用時間：　18 時間／週＋不定期利用	
児童・生徒数　：　614 名	学級数　：　18 学級	教職員数（含非常勤）：　69 名
蔵書冊数　：　19,976 冊	床面積　：　160 ㎡	座席数　：　40 席
４-12 月貸出冊数　：　45,652 冊	児童・生徒の平均貸出数　：　74 冊／人	
年間予算　：　185 万円　（含消耗品・教員図書・図書館システム運用代）		
購読新聞　：　２紙　「朝日小学生新聞」「毎日小学生新聞」		
購読雑誌　：　６誌　「月刊 NEWS がわかる」「子供の科学」「月刊ジュニアエラ」他		
オンラインデータベース　：　０件		
インターネット環境　：　無線 LAN	電子図書館　：　未導入	
情報機器・設備　：　管理用 PC　１台 ／ 検索用 iPad　５台 ／ ノート PC（司書用）１台／iPad（児童用）３台（司書用）１台／大型モニター　１台 ／ ホワイトボード　２台		
貸出管理ソフト　：　情報館	書誌データ入力方法　：　NDL 蔵書目録から取り込み	
学外の他機関との連携協力体制　：　世田谷区立図書館（団体貸出）（株）カーリル		

【令和３年度の活動】
・メディアの時間には、司書が読み聞かせ（実物投影機使用）や語り、本の紹介等を行う
・低・中・高学年向けに「図書新聞」を教員向けに「おとなの図書新聞」を毎月発行
・1 年生・・・図鑑の利用指導・読書ノートの開始
・2 年生・・・メディアルームで秋探し（秋に関する本を探し、紹介する）／図鑑の利用指導（復習）
・3 年生・・・ポプラディア利用指導／『おすすめの本 10 冊チャレンジ』のリスト配布
・4 年生・・・ポップ作り／『おすすめの本 10 冊チャレンジ』のリスト配布／「たくさんのふしぎ」を読んでつながりの本を探す
・5 年生・・・岩波少年文庫を読んで紹介文を書く／グループでブックトークを作る／本のプレゼント（好きな本を封筒に入れ宛先に本のテーマを書く。受け取った人は、読んで返事を書いて返す）
・6 年生・・・『ノンフィクション 50 冊』のリスト配布／ビブリオバトル
・給食室とコラボ 11 月『給食のメニューに関する本の紹介』
・校内の OPAC を公開　・ラボの時間（個人での探求時間）でのレファレンスや資料提供

東京学芸大学附属小金井小学校　なでしこ図書館

（令和３年 12 月末現在）

司書教諭　：　西岡　里奈	司書　：　松岡　みどり（週５日）	
開館時間　：　8:30～15:30	授業での使用時間：　18 時間／週＋不定期利用	
児童・生徒数：　619 名	学級数　：　18 学級	教職員数（含非常勤）：　35 名
蔵書冊数：　24,487 冊	床面積　：　154 ㎡	座席数　：　43 席
4-12 月貸出冊数:　28,566 冊	児童・生徒の平均貸出冊数　：　46 冊／人	
年間予算：　120 万円　（図書費・消耗品費）		
購読新聞：　２紙　「朝日小学生新聞」「読売 KoDoMo 新聞」		
購読雑誌：　４誌　「月刊 NEWS がわかる」「月刊ジュニアエラ」「Newton」「たくさんのふしぎ」		
オンラインデータベース：　１件　「ポプラディアネット」		
インターネット環境：　LAN ケーブル	電子図書館　：　未導入	
情報機器・設備：	管理用 PC　１台　／　検索用 PC　２台 大型モニター　３台　／　書画カメラ　１台　／　黒板　３台	
貸出管理ソフト：　LS@SCHOOL	書誌データ入力方法：　TOOLi-S より MARC ダウンロード	
学外の他機関との連携協力体制：　小金井市立図書館（団体貸出・学級貸出）（株）カーリル		

【令和３年度の活動】

・距離をとった利用ができるよう間隔を空けて館内テーブル・椅子を配置。
・コロナ禍における図書館利用について利用案内に追加しインフォメーション。
・担任・専科教諭による朗読、大型テレビに絵本を書画カメラで写して読み聞かせの実施。
・図書委員会による本、図書館に親しむための企画実施。
・図書委員会による「今日の献立」に合わせた本展示、髙木眞子栄養教諭との「おはなし献立」の実施。「おはなし献立」に関連する図書の展示
・単元のテーマに関連した図書のクラス貸出。
・クラス活動（係等）の中で実施する読み聞かせ、紙芝居の実演のサポート。

東京学芸大学附属竹早小学校　メディアセンター（小中共用）

（令和３年 12 月末現在）

担当教諭　：　高須みどり	司書　：　宮﨑伊豆美（週４日：火～金曜）	
開館時間　：　9:30～16:30	授業での使用時間：　12 時間／週＋不定期利用	
児童・生徒数　：　411 名	学級数　：　12 学級	教職員数（含非常勤）：　25 名
蔵書冊数　：　13735 冊 （小中計 26814 冊）	床面積　：　280 ㎡	座席数　：　50 席（最大 80 席）
4-12 月貸出冊数　：　18379 冊	児童・生徒の平均貸出数　：　45 冊／人	
年間予算　：　100 万円（含消耗品・図書館システム運用代）		
購読新聞　：　なし（中学購入新聞閲覧可能）	購読雑誌　：なし	
オンラインデータベース　：　電子書籍サービス Yomokka！　ポプラディアネット試用中		
インターネット環境　：無線 LAN	電子図書館　：　未導入	
情報機器・設備　：　管理用 PC　小中各１台 ／ 検索用 PC　１台 ／複合機　１台 ／ ホワイトボード　３台　／大型モニター　１台		
貸出管理ソフト　：　LS@SCHOOL	書誌データ入力方法　：　TOOLi-S より MARC ダウンロード	
学外の他機関との連携協力体制　：文京区立図書館（団体貸出）　（株）カーリル（簡易 OAPC 作成）		

【令和３年度の活動】

・４月全クラスにオリエンテーション実施（2・3 年：分類、4 年：百科事典、5 年：年鑑、6 年：出典）
・全クラス週１回メディアの時間に、読み聞かせ・ブックトーク・テーマ読書など実施。
・「メディアセンター便り」の発行　・おはなし給食支援（11 月より月１回）
・検索機の設営、デジタルプラットフォームの作成
・授業資料支援：1 年「くちばし」「水族館」「動物園」／ 2 年「ふきのとう」「運動会」「写真絵本」「百科事典の使い方」／3 年「百科事典の使い方」「生きもの図鑑」「科学読み物」「食べ物のひみつ」「詩歌」「ファンタジー」「アリの行列」／4 年「中越地震」「戦争の絵本」「ゴミ」「博物館」「世界遺産」／6 年「タイ」

東京学芸大学附属大泉小学校　マルチメディア室

（令和３年 12 月末現在）

司書教諭　：　山下 美香	司書　：　富澤 佳恵子（週５日）	
開館時間　：　8:00～16:30	授業での使用時間：　12 時間／週＋不定期利用	
児童・生徒数　：　593 名	学級数　：　22 学級	教職員数（含非常勤）：　55 名
蔵書冊数　：　13,082 冊	床面積　：　160 ㎡	座席数　：　44 席
4-12 月貸出冊数　：　12,857 冊	児童・生徒の平均貸出数　：　21 冊／人	
年間予算　：　110 万円　（含消耗品・教員図書・図書館システム運用代）		
購読新聞　：　２紙　「朝日小学生新聞」「読売 KoDoMo 新聞」		
購読雑誌　：　２誌　「月刊 NEWS がわかる」「子供の科学」		
オンラインデータベース　：　０件		
インターネット環境　：　無線 LAN	電子図書館	未導入
情報機器・設備　：	管理用 PC　１台 ／ 検索用 PC　１台 ／ 児童用タブレット　５台 ／ iPad３台　／　複合機　１台／ ホワイトボード　３台／　モニター　１台	
貸出管理ソフト　：　図書丸ねっと	書誌データ入力方法　：　TOOLi-S, JAPAN/MARC　より MARC ダウンロード	
学外の他機関との連携協力体制　：　練馬区立図書館（団体貸出、連絡協議会）　（株）カーリル		

【令和３年度の活動】

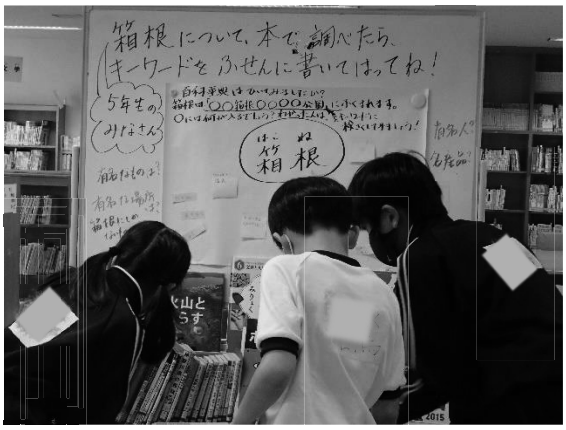
・読み聞かせ：絵本はビッグブックの利用や、マルチメディア室のモニターで拡大して実施。

・「図書だより」の発行（司書教諭、学校司書で分担して執筆）

・オリジナル読書記録の取り組み：１年・２年「きくのこどくしょのきろく」（ファイル式）
３年・５年・６年「きくのこ読書ノート」（ノート式）

・授業支援：１年探究科「はてなとびっくり！きせつのしょうこ」（資料用意）／ ２年探究科、「生活の中にある科学を見つけよう」（資料用意）／３年探究科「自然と共生する環境を考えよう」（資料用意）／４年国語「百科事典での調べ方」（解説）、探究科「地域は時代とともに生きている」（資料用意）／５年国語「図書館を使いこなそう」（資料用意、教材作成補助）、社会「公害」（資料用意）／６年社会「憲法」（導入に絵本の読み聞かせ）等

・その他：学年文庫用意（１年）



東京学芸大学附属世田谷中学校　図書館

（令和３年 12 月末現在）

司書教諭　：　関野 かなえ	司書　：　村上 恭子（週５日）	
開館時間　：　8:30～16:30	授業での使用時間：　102 時間	
児童・生徒数　：　418 名	学級数　：　12 学級	教職員数（含非常勤）：　36 名
蔵書冊数　：　23,689 冊	床面積　：　144 ㎡	座席数　：　40 席
4-12 月貸出冊数　：　4,499 冊	児童・生徒の平均貸出数　：　10.8 冊／人	
年間予算　：　200 万円　（含消耗品・備品）		
購読新聞　：　２紙　「東京新聞」「朝日中高生新聞」		
購読雑誌　：　14 誌　「月刊ジュニアエラ」「Newton」「鉄道ファン」「スクリーン」他		
オンライン DB：　３件　「ヨミダス for school」「ジャパンナレッジ Lib」「ﾙｰﾗﾙ電子図書館」		
インターネット環境　：　無線 LAN	電子図書館　：　LibrariE（ライブラリエ）	
情報機器・設備　：　管理用 PC　１台 ／ 検索用 PC　１台 ／ 生徒用タブレット　20 台 複合機　１台 ／大型モニター　１台／ ホワイトボード　２台		
貸出管理ソフト　：　情報館	書誌データ入力方法　：　NDL 蔵書目録からの取り込み	
学外の他機関との連携協力体制　：　世田谷区立図書館（団体貸出）、（株）カーリル（OPAC ）		

【令和３年度の活動】

・５月・６月　公開研究会に向けて
　　１年社会科（地理分野）の調べ学習（オンライン併用）
　　３年家庭科　食と健康　国語科とのコラボ読書課題の実施
・10 月～11 月　読書課題（国語・英語）哲学に関する本を読もう
・11 月　学校図書館の活性化にむけた文科省事業「情報の入り口としての学校図書館活用」・教科連携
　　３年家庭科「絵本を通して幼児とのかかわりと、発達について考える」
　　３年国語科「ことばで表す～「相手」をみつめて」
・12 月～２月　１年保健体育科　探究学習はじめの一歩「健康新聞をつくろう」
　そのほか、学んだ分野に関連した本を読んでの「理科新聞」の作成、英語多読での利用等
　図書委員会企画　“小説が原作の映画”鑑賞会（12 月）、先輩と語ろう！（１月）

東京学芸大学附属小金井中学校　図書館

（令和３年 12 月末現在）

司書教諭　：　川村　栄之	司書　：　長友　春陽（週３日）	
開館時間　：　10:00～17:00	授業での使用時間：　22 時間／年	
児童・生徒数　：　420 名	学級数　：　12 学級	教職員数（含非常勤）：　40 名
蔵書冊数　：　15,502 冊	床面積　：　136 ㎡	座席数　：　44 席
4-12 月貸出冊数：　2,251 冊	児童・生徒の平均貸出数　：　5 冊／人	
年間予算　：　116 万円　（含消耗品、備品、システム代）		
購読新聞　：　3 紙　「産経新聞」「毎日新聞」「読売新聞」（「朝日新聞」は教員室で購入）		
購読雑誌　：　3 誌　「月刊 NEWS がわかる」「ナショナルジオグラフィック　日本版」「Number」		
オンラインデータベース　：　0 件		
インターネット環境　：　LAN ケーブル	電子図書館　：　未導入	
情報機器・設備　：　管理用 PC　1 台 ／ 検索用 PC　1 台 業務用 PC　1 台　／　ホワイトボード　1 台		
貸出管理ソフト　：　ウェルダン	書誌データ入力方法　：　手入力	
学外の他機関との連携協力体制　：　小金井市立図書館（団体貸出）　（株）カーリル		

【令和３年度の活動】

・4 月 19 日より開館、貸出スタート。
・常時換気、アクリル板の設置、注意啓発ポスターの掲示等のコロナ対策。
・実習生の図書館見学
・授業への協力：総合学習（修学旅行の事前学習）、課題研究、英語（日本文化の紹介、多読）、保健体育（健康と環境等）
・図書だより「BOOK　MARK」の発行（新着本のお知らせ等）
・展示（科学道 100 冊、課題図書、大河ドラマ等）
・図書委員会による活動（図書新聞の発行、キャンペーンの開催、おすすめ本の紹介等）

東京学芸大学附属竹早中学校　メディアセンター （小中共用）　（令和３年 12 月末現在）

司書教諭　：　荻野　聡	司書　：　中村　誠子（週５日）	
開館時間　：　10:00～16:00	授業での使用時間：　51 時間／年	
児童・生徒数　：　432 名	学級数　：　12 学級	教職員数（含非常勤）：　40 名
蔵書冊数　：　13,101 冊（小中計 26,814 冊）	床面積　：　280 ㎡	座席数　：　50 席(最大 80 席)
４-12 月貸出冊数　：　4,796 冊	児童・生徒の平均貸出数　：　9.1 冊／人	
年間予算　：　120 万円　（別途環境整備費）		
購読新聞　：　１紙　「朝日新聞」(予算外)		
購読雑誌　：　１誌　「Newton」		
オンラインデータベース　：　０件		
インターネット環境　：　無線 LAN	電子図書館　：　未導入	
情報機器・設備　：　管理用 PC　小中各１台 ／ 検索用 PC　１台 ／ 児童用タブレット　５台 複合機　１台 ／ ホワイトボード　３台／大型モニター　１台		
貸出管理ソフト　：　LS@SCHOOL	書誌データ入力方法　：　TOOLi-S より MARC ダウンロード	
学外の他機関との連携協力体制　：　文京区立図書館（団体貸出）　㈱カーリル(簡易 OPAC)		

【令和３年度の活動】
《1 年生》利用オリエンテーション／国語「POP づくり」／国語「古典を絵本で紹介しよう」／総合「校外学習：白馬・信州について調べる」
《2 年生》道徳「桃太郎から〇〇を考える」／総合「校外学習：奈良について調べる」
《3 年生》国語「ココプロ：国語科個人研究プロジェクト」／家庭「保育：絵本制作」
《図書委員会》文化研究発表会への参加／広報紙の作成／オンラインでのリレー小説実施／国立附属学校四校図書委員会交流会への参加
《その他》全校生徒の自由研究･卒業論文支援／図書館通信発行／館内イベント実施　など

東京学芸大学附属国際中等教育学校　総合メディアセンター

（令和３年 12 月末現在）

司書教諭　：　渡津　光司	司書　：　渡邊 有理子（週 5 日）	
開館時間　：　9:00～17:00	授業での使用時間：　224 時間	
児童・生徒数　：　723 名	学級数　：　24 学級	教職員数（含非常勤）：　85 名
蔵書冊数　：　29.500 冊	床面積　：　160 ㎡	座席数　：　44 席
4-12 月貸出数　：　4.774 冊	児童・生徒の平均貸出数　：　中学生：8.6 冊／人 高校生：4.7 冊／人	
年間予算　：　200 万円　（含消耗品・教員図書・図書館システム運用代）		
購読新聞　：　6 紙　「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」「東京新聞」「産経新聞」「the japan times alpha」		
購読雑誌　：　18 誌　「Newton」「ソトコト」「芸術新潮」「TIME」「The Economist」他		
オンラインデータベース　：　4 件　「朝日けんさくくん」「理科年表」「化学書資料館」「ジャパンナレッジ」		
インターネット環境　：　無線 LAN	電子図書館　：　未導入	
情報機器・設備　：　管理用 PC　1 台 ／ 検索用 PC　2 台 ／ 生徒用ノート PC　35 台 HD 液晶パネル　6 台 ／ ホワイトボード　2 台		
貸出管理ソフト　：　情報館 V9	書誌データ入力方法　：　NDL 蔵書目録より取り込み	
学外の他機関との連携協力体制　：　練馬区立図書館（団体貸出、連絡協議会）、国立国会図書館		

【令和３年度の活動】

・全校生徒への母語支援アンケートの実施および必要言語の図書手配と受け入れ
・東京都人権プラザ「読むじんけん―感染症と差別」の展示実施（10 月）
・主な各学年の授業支援
中１：生物「身近な植物観察」「ポケモンで動物図鑑をつくろう！」「火山活動」
　　技術「木工と接着」国語「竹取物語とかぐや姫の絵本」「故事成語」家庭科「絵本研究」
中２：日本文化探訪「能と狂言」家庭科「食品添加物」職業インタビュー
中３：国際教養「ビブリオバトル沖縄」国語「万葉集と古今和歌集」「俳句と句会」
高１：公民「株とお金」「政治と選挙」国語「故事成語」
高２：国語 DP（ディプロマ課程）「カミュと『ペスト』」
高３：国語 DP（ディプロマ課程）「大鏡と史記」

東京学芸大学附属高等学校　図書館

（令和３年 12 月末現在）

司書教諭　：　田中義洋	司書　：　岡田和美（週５日）	
開館時間　：　9:40～16:30	授業での使用時間：　70 時間／年＋不定期利用	
児童・生徒数　：　986 名	学級数　：　24 学級	教職員数（含非常勤）：　80 名
蔵書冊数　：　31,00 冊	床面積　：　359.25 ㎡	座席数　：　140 席
4-12 月貸出冊数　：　3,506 冊	児童・生徒の平均貸出数　：　3.5 冊／人	
年間予算　：　255 万円　（含消耗品・教員図書・図書館システム運用代）		
購読新聞　：　5 紙　「朝日新聞」「毎日新聞」「読売新聞」「日本経済新聞」「The Japan Times」		
購読雑誌　：　65 誌　「TIME」「ENGLISH JOURNAL」「日経サイエンス」「Newton」「芸術新潮」		
オンラインデータベース　：　1 件　「朝日けんさくくん」		
インターネット環境　：　無線 LAN	電子図書館	ブルーバックス　60 万
情報機器・設備　：　管理用 PC　3 台 ／ 検索用 PC　8 台 ／ プロジェクター ／大型モニター2 台 ／ホワイトボード　2 台		
貸出管理ソフト　：　ブレインテック	書誌データ入力方法　：　TOOLi-S より MARC ダウンロード	
学外の他機関との連携協力体制　：　世田谷区立図書館　女性教育情報センター　防災専門図書館 東京都立多摩中央図書館　東京都立中央図書館 国立国会図書館　（株）カーリル		

【令和３年度の活動】

・日本教育大学協会研究集会　福岡教育大学「教育実習生のための授業に役立つ情報収集と学校図書館」
・公開教育研究大会　芸術科（音楽１）「PC を活用した創作活動～相互批評によるブラッシュアップ」
・学芸大学教育実習生の受け入れ　オリエンテーションの実施　教育実習･資料支援
・ブックトーク　芸術（音楽１）「自分自身の音楽史　音楽との出会い」
・授業支援・資料支援「地理　総合学習」「生物　遺伝･ウイルス」「保健体育　ハームリダクション」他
・SSH･SGH　探究授業支援、関連資料の選書および受け入れ
・QR コードの活用によるスマホでの検索の充実、コロナ対策として貸出冊数を無制限とした
・電子書籍を購入し、生徒の図書館活用の利便性を高めた

東京学芸大学附属特別支援学校　プレイルーム（幼稚部図書コーナー）
個別学習室Ⅱ（小学部図書コーナー）
ランチルーム（中学部図書コーナー）
生徒会室　　（高等部図書コーナー）

（令和 3 年 12 月末現在）

司書教諭　：　野原 隆弘（中学部）		司書　：　宮崎　伊豆美（年 18 日）			
開館時間　：　8:30～15:30		授業での使用時間　：　2 時間（特設）／年			
児童･生徒数　：	幼稚部　4 名 小学部　17 名 中学部　17 名 高等部　27 名	学級数　：	幼稚部　1 学級 小学部　3 学級 中学部　3 学級 高等部　3 学級	教職員数（含非常勤）：	幼稚部　4 名 小学部　10 名 中学部　10 名 高等部　12 名
蔵書冊数　：	幼稚部　70 冊 小学部　640 冊 中学部　335 冊 高等部　560 冊	床面積　：	幼稚部　16 ㎡ 小学部　16 ㎡ 中学部　10 ㎡ 高等部　16 ㎡	座席数　：	幼稚部　0 席 小学部　4 席 中学部　0 席 高等部　4 席
年間貸出総数　：	幼稚部　0 冊 小学部　約 400 冊 中学部　約 150 冊 高等部　約 30 冊	児童・生徒の平均貸出冊数：	幼稚部　0 冊／人 小学部　20 冊／人 中学部　7 冊／人 高等部　1 冊／人		
年間予算：　0 円					
購読新聞：　0 紙　　購読雑誌：0 誌					
オンラインデータベース：　0 件					
インターネット環境：　無線 LAN　、IT 図書室（授業用）				電子図書館　：　未導入	
情報機器･設備　：　事務用 PC　1 台　／　検索用 PC　0 台 インターネット閲覧用 PC　10 台（IT 図書室）					
貸出管理ソフト：　なし（ブラウン式）		書誌データ入力方法　：　Excel 原簿手入力			
学外の他機関との連携協力体制　：　東久留米市立図書館（団体貸出） （株）カーリル（OPAC 作成）					

【令和 3 年度の活動】

・図書の整理、寄贈本受入れ・配架、
・小・中・高でのブラウン式貸出、保護者へのおうち貸出、
・中学部の総合学習支援（地域探検、東京探検）
・おはなし給食資料支援　・電子書籍トライアル参加
・マルチメディア DAISY 図書整備　・図書館だより発行
・小・中・高図書コーナーの季節の飾り、
・蔵書データ整理、カーリル OPAC 制作・公開

東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎

3～5 歳児の各保育室の絵本棚には発達や季節、保育内容に応じた絵本や図鑑等が置いており、子どもたちは好みの本を見つけて読んでいる。また、学年毎に月間絵本を購読し、学級の友達と同じ絵本を見たり読んだりする機会を設けると共に、家庭に持ち帰り保護者とも楽しめるようにしている。2 学期には、各学年で読み聞かせした絵本や観賞した人形劇などを題材に劇遊びを行った。子どもたち自身が物語の登場人物になることで、物語により入り込んだり、役を表現したりして楽しむ姿が見られた。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止に努めつつ、保護者有志による図書部の、視聴覚機器の使用やオペレッタとの融合など、様々な方法を取り入れながらお話の世界を楽しめるような取り組みも継続している。園で図書に親しむ機会を持ち、保護者とも連携することで、地域の図書館に親しみをもって関わる親子も多い。

東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎

毎日必ず行っている担任教師による読み聞かせは、子供たちがとても楽しみにしているひと時です。絵本や童話の世界に浸り、笑ったりドキドキしたりと友達と一緒に想像の世界を楽しんでいます。蔵書は絵本、幼年童話、科学絵本・図鑑など約 1600 冊で、月に二回絵本の貸し出しを行っています。コロナ禍での対応として 5 歳児は科学絵本、4 歳児は物語の月間絵本も購入し、家庭でも本に親しむ機会の充実を図っています。活用してく古くなった蔵書の入れ替えを今後行いながら、データベース化を図っていくことを検討しています。

■2021 年度　附属学校図書館相互貸借データ一覧

2021 年 12 月末現在

受入校＼貸出校	世小	世中	附高	金幼	金小	金中	竹小中（含竹幼）	泉小	国際中等	特別支援	附属図書館	運営専門委員会【布絵本】	合計
世小		2	11	0	1	0	0	1	0	0	18	0	33
世中	77		22	0	4	23	14	0	16	0	2	0	158
附高	0	0		0	0	0	0	0	0	0	10	0	10
金幼	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0
金小	2	0	0	0		0	0	0	6	0	0	0	8
金中	0	0	2	0	32		0	0	0	0	0	0	34
竹小（含竹幼）	2	6	20	0	6	0		4	6	0	0	0	44
竹中	3	11	44	0	18	1		0	5	0	13	0	95
泉小	0	0	0	0	4	0	0		0	0	7	0	11
国際中等	6	33	75	0	26	0	31	29		0	36	0	236
特別支援	1	4	2	0	6	0	16	8	0		0	0	37
附属図書館	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0
附属学校課・支援室	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0
大学催し/研究室	0	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0	12
合計	91	56	176	0	109	24	61	42	33	0	86	0	678

＜附属学校教職員及び生徒・児童・幼児への貸出および連絡便を使ったサービス＞

2021 年 9 月 7 日改定

大学図書館所蔵資料を利用した場合

		生徒・児童・幼児
来館利用	貸出	学校図書館に預けた貸出カードを持って来館 6 冊 2 週間 （高大連携の生徒と同等）
	その他のサービス	視聴覚資料の利用　× 大学図書館の OPAC の検索　○（インターネットの利用　×） 館内閲覧・事典類の利用　○ セルフコピー　○
連絡便利用（小金井地区を除く）	貸出	学校図書館を介して FAX またはメールで、連絡便の予定日 3 日前（土日祝日を除く）までに申し込み。 連絡便で学校図書館宛に送付。 各学校図書館　24 冊 1 ヵ月

■活動の記録　～会議等～

〈会　議〉
○学校図書館事業委員会
第１回　７月 28 日（水）　Teams による　オンライン会議
・今年度の事業内容について・事業委員の先生からの御指導

○学校図書館運営専門委員会
第１回　４月 22 日（木）　Teams による　オンライン会議
・今年度の活動について・報告会の開催方法について

第２回　11 月 17 日（水）　Teams による　オンライン会議
・報告会について

第３回　３月 24 日（木）　オンライン会議（予定）
・今年度の反省　来年度の文科省事業について他

○学校図書館運営専門委員会　司書部会　(全 10 回)
（今年度の司書部会は第７回を除きすべてオンラインで行った）

第１回	４月 28 日(水)	各校の近況報告　DB の分担　レファ共との連携について 南山大学との研究協力　６月司書講座　７月司書研修について
第２回	５月 26 日(水)	各校の近況報告　司書講座　司書研修　南山大学との研究協力について
第３回	６月 23 日(水)	各校の近況報告　司書講座　司書研修　文科省事業について
第４回	７月 14 日(水)	各校の近況報告　司書講座ふりかえり　司書研修について
第５回	９月 22 日(水)	各校の近況報告　司書研修ふりかえり　11 月司書講座について 偕成社編集者さんの講演　文科省事業について
第６回	10 月 27 日(水)	各校の近況報告　11 月司書講座　文科省事業報告会について
第７回	11 月 10 日(水) 於）国際中等	各校の近況報告　11 月司書講座ふりかえり 文科省事業担当地区ごとの打ち合わせ（研修・DB・報告集） GAKUMOPAC リリースについて高橋課長・カーリルと打ち合わせ
第８回	１月 26 日(水)	各校の近況報告　報告会の振り返り　報告書・報告集について 次年度の司書講座、司書研修について
第９回	２月９日(水)	各校の近況報告　報告会の振り返り　報告書・報告集について 次年度の司書講座について
第 10 回	３月 29 日(水)	報告集・報告書について　次年度文科省事業について

〈特別支援学校司書派遣日〉※全 18 回中６回分を文科省事業予算で派遣
４月 19 日（月）、25 日（日）、５月 10 日（月）、24 日（月）、６月７日（月）、21 日（月）、７月５日（月）、14 日（水）、９月 13 日（月）、27 日（月）、10 月 18 日（月）、25 日（月）、11 月９日（火）、25 日（木）、12 月６日（月）、１月 17 日（月）、２月 14 日（月）、３月７日（月）（全 18 回）
＊平成 22 年度より、学校司書を派遣。

教育実習生のための授業に役立つ情報収集と学校図書館活用

―高校家庭基礎における―考察―

○ 東京学芸大学附属高等学校　教諭　桒原 智美
東京学芸大学附属高等学校　司書　岡田 和美
東京学芸大学附属世田谷中学校　司書　村上 恭子
東京学芸大学教育学講座　教授　前田 稔

はじめに：

令和 3 年 4 月文部科学省通知「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行について」 において、4（1）④では「教育実習は、学校教育の実際を体験的、総合的に理解できる重要な機会であり、本来、新型コロナウイルス感染症の影響がなければ履修すべき科目である。」とあり、教育実習を実施することの大切さ、学生が学校教育の実際を体験的、総合的に理解できる機会が必要であることが明記されている。しかし、現在は制約の多い中、実習を各校工夫している。教育実習生教育において、準備から実習実施において図書（本）および資料を活用することは有効なことと考える。2020 年 8 月 9 月家庭科教育実習生 6 名が『先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース』を活用し家庭基礎「高齢者」の教育実習の授業準備を実施した（令和 2 年度日本教育大学協会全国大会発表）。コロナ禍、図書館使用も制限される中で学校図書館データベースで指導案の学習と掲載の選書を活用して教育実習にのぞむことが可能であった。しかし、CiNii などのデータベースを加えても高齢者に関連した「共生社会」についての視点で書かれているものは少ないため「授業に役立てることができるものが少ない」等の意見があった。そのため授業時には学校図書館の本、企業の動画、YouTube などの活用を加えた。

教育実習生の教育の一つとして、学校図書館の活用を学習することは、今後、さらに重要になってくると考える。しかし、今後もコロナ禍の大学の図書館使用の制限や教育実習に必要な情報を得ることの難しさなどが考えられる。教育実習生が自ら情報を収集しリストを作成することを試みることによる教育実習における実習生の情報収集について考察をすることとした。

方法：

1.　家庭科教育実習生 6 名に 2021 年 6 月学校図書館を活用した教員による授業実践の指導案やブックリストが掲載された『先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース』を提供し、実習での学校図書館活用の実践説明、解説を加える。7 月それらと実習生自ら HP 等で収集した情報を活用し、教育実習の準備をするときに学校図書館、本、企業の動画、YouTube 等のレファレンスブックリストを作成してもらう。9 月それらのリストを活用した授業を教育実習時に実施し、その効果の聞き取り調査と 5 件法のアンケート調査を実施する。

2.　9 月準備資料に対する授業時の生徒の自由記述感想を分析する。分析には統計解析ソフト及び KHCoder ver.3 を使用する。

3.　教育実習生が作成した活用リストの一部を『先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース』に提供し、改善点、今後の実習生の授業への活かし方を考察する。

結果：

実習生の作成したブックリストには、複数人が厚生労働省「厚生労働白書」厚生労働省 HP「高齢期の暮らし、地域の支え合い、健康づくり・介護予防、就労に関する意識」や国立長寿医療研究センター「すこやかな高齢期をめざして」などの公的機関の情報をリストにあげていた。（聞き取りおよびアンケートは 9 月調査実施、分析結果を発表時に掲載予定。）

今回の実習生の「高齢者とは」授業用レファレンスブックリスト例（一部抜粋）：

	「高齢者とは」レファレンスブックリスト				
NDC	書名	著者	出版社	出版年	ISBN
498.1	厚生労働白書 平成28年版 平成27年度厚生労働行政年次報告 ; 人口高齢化を乗り越える社会モデルを考える	厚生労働省 編	日経印刷	2016	9784865790665
493.7	高齢期の心を活かす 衣・食・住・遊・眠・美と認知症・介護予防 シリーズこころとからだの処方箋. 9	田中 秀樹 編 上里 一郎 監修 田中 秀樹 ほか著	ゆまに書房	2006	4843318213
369.26	高齢者に対する支援と介護保険制度 高齢者福祉・介護福祉 社会福祉士シリーズ. 13	福祉臨床シリーズ編集委員会 編 東 康祐 責任編集 渡辺 道代 責任編集	弘文堂	2015	9784335611698
369.26	高齢者に対する支援と介護保険制度	笠原 幸子 著	ミネルヴァ書房	2014	9784623070206
596	高齢者に喜ばれる楽しい食事 福祉調理のメニューと調理	広瀬 喜久子 監修 誠心学園 編著 日本食環境研究所 編著	日本医療企画	2002	4890415777
369.26	たのしく学ぶ高齢者福祉 まり子先生のサクセスフル・エイジング入門 MINERVA福祉ライブラリー. 3	伊東 真理子 著	ミネルヴァ書房	1995	4623025756
367.7	東大がつくった高齢社会の教科書 長寿時代の人生設計と社会創造 ; GERONTOLOGY LITERACY TEST OFFICIAL TEXT	東京大学高齢社会総合研究機構 編著	東京大学出版会	2017	9784130624183
367.7	高齢者の「こころ」事典	日本老年行動科学会 監修 井上 勝也 編集代表 大川 一郎 編集代表	中央法規出版	2000	4805818956
491	老化とは何か 岩波新書 新赤版. 297	今堀 和友 著	岩波書店	1993	4004302978
526.3	高齢社会に生きる 住み続けられる施設と街のデザイン	上野 淳 著	鹿島出版会	2005	4306044580

課題：

授業に役立つ情報収集方法とその内容を精査していくことが必要である。

（キーワード：教育実習、家庭科、学校図書館）

令和3年度文部科学省事業報告会 プログラム

～みんなで使おう! 学校図書館 Vol.13～

日 時　令和３年 12 月 18 日（土）

13:00～16:50　（ZOOM によるオンライン開催）

1. はじめのことば　東京学芸大学附属学校運営部 運営参事　古家 眞

2. 授業実践報告　（13:05～15:05）

① 附属世田谷小学校
「情報活用能力の育成を支える学校図書館」　司書教諭 梅田 翼
学校司書 金澤 磨樹子

② 附属世田谷中学校
「情報の入り口としての学校図書館活用」
必要とされる学校図書館づくりに向けて　学校司書 村上 恭子
教科連携 絵本を通して、幼児とのかかわり、発達について考える　家庭科・司書教諭 関野 かなえ
ハブとしての学校図書館をどうつくっていけるのか　国語科教諭 渡邉 裕

③ 附属国際中等教育学校
「中学校技術科における学校図書館の問題解決を通した知識・技能の習得を目指す授業実践」
技術科・司書教諭 渡津 光司
学校司書 渡邊 有理子

休憩　（15:05～15:20）

3.GAKUMOPAC 公開　東京学芸大学附属図書館 学術情報課長 高橋 菜奈子

4. 指導・講評　（15:25～16:45）

本事業委員 今井 福司　白百合女子大学准教授
長谷川 優子　埼玉県立久喜図書館・東京学芸大学非常勤講師
野口 武悟　専修大学文学部教授
鎌田 和宏　帝京大学教育学部教授

4. 終わりのことば　東京学芸大学教育学部教授　前田 稔

申し込み方法「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」トップ画面から
（申し込み締め切り 12 月 17 日 17:00 参加費 無料）

おわりに

東京学芸大学学校図書館運営専門委員長・附属学校運営参事　古家 眞

昨年度、この拙文「おわりに」の書き出しは以下のようなものでした。

会話の中に「コロナだから・・・」という言葉が入ります。そこには、新型コロナウィルスが蔓延する状況を受け入れざるを得ない私たちがいます。

しかし、コロナだから出来なかったことやうまくいかなかったことだけではなく、コロナだから出来るようになったことやコロナだから分かったこともたくさんありました。

そして2022年冬、我が国のコロナ感染状況に目をやると、オミクロン株が急激に広がり、今年2月には東京都で新規感染者が2万人を超えました。

一方、多くの人々がその年齢や職種等によって「with コロナ」をどのように定義し、どのように行動していくのかを冷静に判断できるようになってきました。このことは既に検証されつつある「日本人感染者数の少なさの根拠」にもなっているところです。

そのことは、大学でも附属学校図書館運営専門委員会でも同様でした。

昨年度開催した初めてのオンライン事業報告会は、ある程度予想していたとはいえ「全国からの参加」があったことに、私たち主催者は驚きと喜びを感じていました。そして、図書館運営専門委員会による省察に基づいて今年度は各学校からの実践発表に費やす時間を大幅に増やしました。

今年度の附属世田谷小学校、附属世田谷中学校、附属国際中等教育学校の実践的な研究発表は、公立学校等のこれからの学校図書館の充実・発展に寄与するものになると確信しています。3校の司書教諭、学校司書の皆さんには、その御労苦に対して心より感謝申し上げたいと思います。

29の都道府県から約150名の方の参加が見られた事業報告会でしたが、参会者の方々から寄せられた御意見を基にして来年度の開催に向けた準備が始まっています。

また、GAKUMOPAC公開についても大きな反響がありました。各自治体における今後の図書館サービスの発展・充実の手段として新しいシステムが提示されたとともに、学校図書館の役割についても新たな指針が示されたと感じました。

本学構内では、1月11日に附属図書館増築リニューアルオープンを迎えました。令和2年1月から始まった増築工事も終了し、同日式典が開催される運びとなりました。こちらにも、附属学校の図書館紹介コーナーが設けられる予定ですのでぜひとも御覧ください。

結びに、私たちの取組を支援してくださった文部科学省、事業委員、そして東京学芸大学関係の方々に厚く御礼申し上げます。

附属学校図書館運営専門委員会の皆さん一年間御苦労様でした。

令和３年度　学校図書館運営専門委員会関係者名簿

所属	学校名	氏名	職名	運営専門委員会	附属学校図書館部会	司書部会
附属学校運営部		古家　　眞	附属学校運営部運営参事委員長	○	○	
附属学校課		佐藤　健一郎	附属学校課長	○		
附属学校	幼稚園小金井園舎 幼稚園竹早園舎	谷米　桂奈	教諭		○	
		神山　雅美	教諭		○	
	世田谷小学校	梅田　翼	司書教諭	○	○	
		金澤　磨樹子	司書	○	○	○
	小金井小学校	西岡　里奈	司書教諭		○	
		松岡　みどり	司書		○	○
	竹早小学校	高須　みどり	担当教諭		○	
		宮﨑　伊豆美	司書		○	○
	大泉小学校	山下　美香	司書教諭		○	
		富澤　佳恵子	司書		○	○
	世田谷中学校	関野　かなえ	司書教諭	○	○	
		村上　恭子	司書	○	○	○
	小金井中学校	川村　栄之	司書教諭		○	
		未定	司書		○	○
	竹早中学校	荻野　聡	司書教諭		○	
		中村　誠子	司書		○	○
	国際中等教育学校	渡津　光司	司書教諭	○	○	
		渡邊　有理子	司書	○	○	○
	高等学校	田中　義洋	司書教諭		○	
		岡田　和美	司書	○	○	○
	特別支援学校	野原　隆弘	司書教諭		○	
		宮崎　伊豆美	司書（竹小と兼務）			
学術情報課 （大学図書館）		高橋　菜奈子	学術情報課長	○		
		高井　　力	学術情報課副課長	○		
		近藤　　薫	学術企画係長	○		

事務担当	須賀　誠	附属学校第一係長	

事業委員会・研究協力者一覧

〈事業委員会〉

氏名	所属・職名	備考
前田 稔	東京学芸大学　総合教育科学系　教授	図書館学・学校図書館
鎌田 和宏	帝京大学　教育学部　初等教育学科　教授	教育方法・情報リテラシー
野口 武悟	専修大学　文学部人文・ジャーナリズム学科　教授	図書館史・学校図書館
長谷川 優子	埼玉県立久喜図書館　司書	レファレンス・情報リテラシー
今井 福司	白百合女子大学 基礎教育センター 准教授	学校図書・図書館史

〈研究協力者〉

＊　浅石　卓真　　南山大学　人文学部　人類文化学科　准教授
＊　衛藤　北斗　　東京都世田谷区立瀬田中学校　学校司書
＊　きむらともお　ハコブネ×ブックス主宰
＊　栗原　智美　　東京学芸大学附属高等学校　家庭科教諭
＊　中山 美由紀　前東京学芸大学附属小金井小学校　学校司書　立教大学兼任講師
＊　橋本 健志　　合資会社　風夢
＊　宗友 史織　　NPO ブックスタート
＊　ムラタエイコ　デザイン担当
＊　吉岡 裕子　　前東京学芸大学附属世田谷小学校　学校司書
＊　吉本 龍司　　(株) カーリル　代表取締役
＊　渡邉 裕　　東京学芸大学附属世田谷中学校　国語科教諭

（敬称略　五十音順）

令和３年度　文部科学省事業
学校図書館の活性化に向けた調査研究

みんなで使おう！学校図書館　Vol.13

「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」報告集

編　集　東京学芸大学　学校図書館運営専門委員会
発行日　令和４年３月
発行者　古家 眞
発　行　東京学芸大学　附属学校運営部
〒184-8501　東京都小金井市貫井北町 4-1-1

『みんなで使おう！学校図書館』Vol.1～12 は、東京学芸大学附属図書館 HP リポジトリで読むことができます。

http://www.u-gakugei.ac.jp/~schoolib/htdocs/

大学図書館+附属学校図書検索
GAKUMOPAC 公開しました！
https://www.u-gakugei.ac.jp
/~schoolib/gakumopac/
スマホからでもかんたん検索！
ご活用ください！